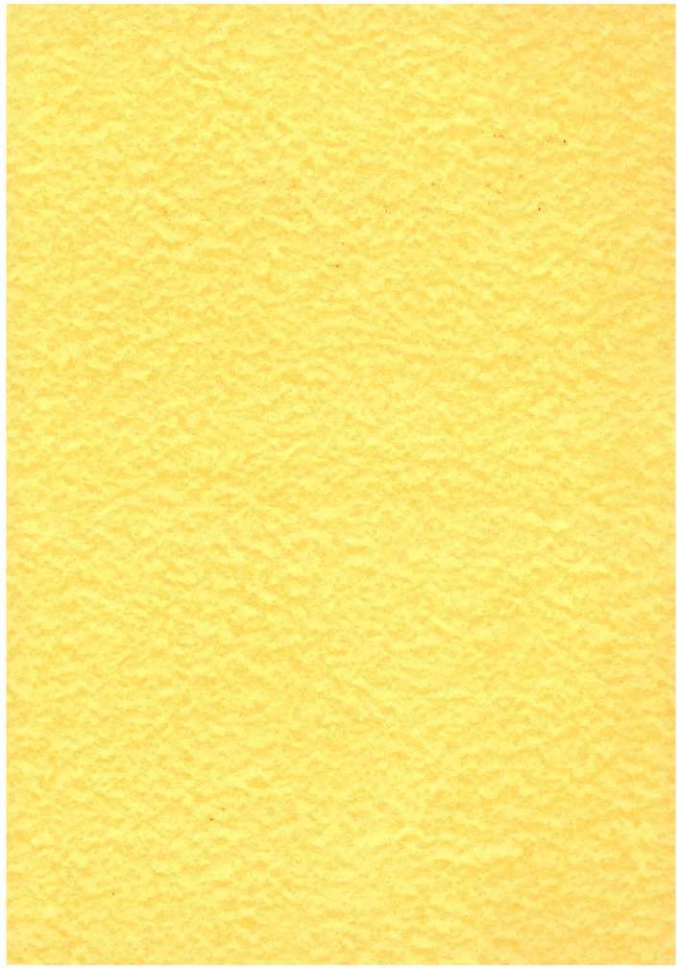


大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告 I

1995.2

財団法人 大阪市文化財協会



大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

I

1995.2

財団法人 大阪市文化財協会

抄 録

ふりがな	てんまほんがんであと ほくくつちようきほうこく						
書名	天満本願寺跡発掘調査報告						
副書名							
巻次	I						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	南秀雄・豆谷浩之・森毅・中村博司						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540 大阪市中央区法円坂1-1-35				Tel 06-943-6833		
発行年月日	西暦 1995年 2月 15日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
てんまほんがんに 天満本願寺	おおさかふねおきかしきたく 大阪府大阪市北区 てんまいっちようめ 天満1丁目	27127 -	34度 41分 29秒	135度 31分 27秒	19940105 ～ 19940228	430	造幣局宿 舎建設に 伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
天満本願寺	城下町	豊臣	建物1 溝 道路	陶磁器,瓦,印章1, 漆器,土錘		豊臣期城下町の屋 敷の一面を確認	



豊臣期建物と道路

大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

I

1995.2

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪の人々にとって天満は、夏の天神祭、春の桜の通り抜けなど、とても馴染み深い土地である。今ではその風情も失われたかもしれないが、江戸時代には大川べりに各藩の蔵屋敷が建ち並び、大坂三大市場のひとつである青物市場などで栄えたという。

私たちの発掘調査などによって、現代の大阪の街は、天正11年（1583）の豊臣秀吉の大坂城築城と城下町の建設によってその基礎がつくられたことがわかってきはじめた。秀吉がつくった町は、日本において中世の町から近世の町へ変貌を遂げていく画期となるもので、発掘の成果は全国から注目を集めているところである。

当時の大坂は、大きくみると上町・天満・船場の三つの地域から成っていた。これまでの発掘調査は上町と船場に力が注がれており、この報告書は、天満での最初の豊臣時代の町を対象とした発掘調査をまとめたものとなる。しかも、調査した大蔵省造幣局の敷地は、秀吉によって天満の町がつくられていく出発点となった本願寺跡の有力な推定地に当たる。今回の発掘の結果、豊臣時代の屋敷の一角がその姿を現した。

天満の考古学的調査はまだ緒に付いたばかりであるが、上町・船場と同じように重要な地域であったことは言を待たない。今後の関係各位のご理解とご鞭撻をお願いする次第である。

最後に、発掘調査と報告書の刊行に種々のご協力をいただいた大蔵省造幣局に深謝の意を表したい。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐治 敬三

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大蔵省造幣局の委託を受け、1994年1～2月に実施した北区天満1丁目1番地の造幣局職員宿舍建替に伴う発掘調査報告書である。
- 一、発掘調査は調査課長永島輝臣の指揮のもとに南秀雄が当たり、報告書作成は永島を責任者とし、第Ⅰ章を企画調整課長中村博司、第Ⅱ章と第Ⅳ章第1節を豆谷浩之、第Ⅲ章と第Ⅳ章第3節を南、第Ⅳ章第2節を企画調整課主任森毅が執筆した。金属製品の整理は伊藤幸司と鳥居信子が行い、編集作業は高井健司がこれを助けた。また英文目次の作製は、岡村勝行と調査補助員ロバート・コンデンが行った。
- 一、発掘調査や報告書作成では以下の方々の御教示・御協力を得た。またX線透過写真撮影の実施に際しては、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室の御協力を得た。記して深謝の意を表したい。
渡辺武氏・北川央氏・宮本裕治氏（以上大阪城天守閣）、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）、佐藤浩司氏（財団法人北九州市教育文化事業団）、玉井哲雄氏（千葉大学）、伊藤毅氏（東京大学）、大澤研一氏（大阪市立博物館）、沢田正昭氏・肥塚隆保氏・村上隆氏（以上奈良国立文化財研究所）
- 一、基準点測量および写真測量は阪急航空株式会社、遺物の写真撮影は楠本真紀子氏に委託した。
- 一、遺構名の表記は、堀・堀（SA）、建物（SB）、溝（SD）、道路（SF）、土壌（SK）、柱穴（SZ）、その他（SX）に続けて層位に対応する3桁の番号を付した。
- 一、調査時の測量には国上平面直角座標値（第Ⅵ系）を用いた。方位は座標北、水準値はT.P.値（東京湾平均海水面値）を示す（本文中ではTPと略称）。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査および遺物の整理作業、報告書の作成には主に以下の調査補助員が参加した。
金井環・河田裕司・河村健史・木下衛・木村勇・酒向淑子・沢田潤・田辺朝子・濱口詠子・姫路真保

目 次

序文

例言

第Ⅰ章 調査にいたる経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の歴史的環境と大坂城下町跡の調査状況	3
第1節 遺跡の立地と歴史的環境	3
第2節 大坂城下町発掘調査の現状	7
第Ⅲ章 調査の結果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 層序	14
第3節 豊臣期整地前（Ⅰ期）の遺構と遺物	16
1) 遺構	16
2) 遺物	18
第4節 豊臣期整地後（Ⅱ期）の遺構と遺物	20
1) 遺構	20
i) Ⅱ-1期	20
ii) Ⅱ-2期	23
iii) SB501について	27
2) 遺物	28
i) 陶磁器	28
ii) 瓦類	47
iii) 石製品	49
iv) 金属製品	50
v) 木製品	51
vi) 土鍾	52
第5節 徳川期（Ⅲ期）の遺構と遺物	54
1) 遺構	54
2) 遺物	56

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討	61
第1節 文献史料からみた天満本願寺	61
1) 天満本願寺の位置	61
2) 天満本願寺の周辺	64
3) 本願寺移転後の天満	65
第2節 天満本願寺跡出土陶磁器の検討	68
1) 16世紀末から17世紀前半の陶磁器編年	68
2) 層位別陶磁器の時期	68
3) 大坂出土の薬灰釉陶器	70
第3節 まとめ	74
1) 屋敷地の規模	74
2) 各時期の遺構と天満本願寺などの関係	74
3) 豊臣期陶磁器の組成	76
参考文献	78

あとがき

索引

原色図版目次

- | | |
|----------|---------|
| 1 印章と青花 | 2 唐津焼の軸 |
| 上：豊臣期印章 | 上：裏灰軸 |
| 下：豊臣期青花碗 | 中：灰軸 |
| | 下：透明軸 |

図版目次

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 調査地と大阪城 | 10 1層(Ⅱ期)の遺構 |
| 上：調査地周辺の景観(南から) | 上：1層遺構全景(東から) |
| 下：調査地から大阪城を望む | 下：SK106・105(南から) |
| 2 6層上面(Ⅰ期)の遺構 | 11 6層・5層出土陶磁器 |
| 上：6層上面全景(東から) | 上：6層 |
| 下：SA602(東から) | 下：5層 |
| 3 5層上面(Ⅱ-1期)の遺構 | 12 4層出土陶磁器 |
| 5層上面全景(西から) | 上：4 b層 |
| 4 5層上面・4 b層(Ⅱ-1期)の遺構 | 下：4 a層 |
| 上：5層上面全景(東から) | 13 4 a層・3 b層出土陶磁器 |
| 下：4 b層形成後のSD501とSB501(東から) | 14 SF301内土壌群出土陶磁器 |
| 5 5層上面・4 b層(Ⅱ-1期)の遺構 | 15 SF301内土壌群出土陶磁器 |
| 上：SD501断面(東から) | 16 SF301内土壌群・3 a層出土陶磁器 |
| 下：4 b層形成後のSD501とSB501(西から) | 17 3 d層・3 c層・2層出土陶磁器 |
| 6 3層上面(Ⅱ-2期)の遺構 | 18 2層出土陶磁器 |
| 上：SF301内土壌群とSB501(西から) | 19 2層出土陶磁器 |
| 下：SX302(西から) | 20 2層・1 c層出土陶磁器 |
| 7 2層下面(Ⅱ-2期)の遺構 | 21 1 c層出土陶磁器 |
| 2層下面全景(西から) | 22 瓦類 |
| 8 2層下面(Ⅱ-2期)の遺構 | 23 石製品・金属製品・木製品 |
| 上：2層下面全景(東から) | 24 土鍾・水指および清朝磁器 |
| 下：SZ201・202(東から) | |
| 9 2層下面(Ⅱ-2期)の遺構 | |
| 上：SD201とSB501北壁柱列(東から) | |
| 下：SD201(北から) | |

挿図目次

- | | | | |
|------------------------|----|---------------------------|----|
| Fig.1 調査地位図 | 1 | Fig.6 6層・6層上面検出遺構出土陶磁器実測図 | 18 |
| Fig.2 大阪城跡・城下町跡の主要調査地点 | 8 | Fig.7 5層上面遺構(Ⅱ-1期)実測図 | 21 |
| Fig.3 遺構実測略図 | 12 | Fig.8 4 b層上面遺構(Ⅱ-1期)実測図 | 22 |
| Fig.4 北・西・南壁断面実測図 | 15 | Fig.9 3層上面遺構(Ⅱ-2期)実測図 | 24 |
| Fig.5 6層上面遺構(Ⅰ期)実測図 | 17 | Fig.10 SX302実測図 | 25 |

Fig.11	2層下面遺構（Ⅱ-2期）実測図	26	Fig.30	金属製品実測図	50
Fig.12	唐津焼碗・皿の分類	28	Fig.31	木製品実測図	52
Fig.13	土師器皿口径分布図	29	Fig.32	土師実測図	53
Fig.14	5層出土陶磁器実測図	29	Fig.33	1c・1b層検出遺構（Ⅱ期）実測図	55
Fig.15	4層出土陶磁器実測図	30	Fig.34	SK104実測図	55
Fig.16	3b層出土陶磁器実測図	32	Fig.35	SK106実測図	55
Fig.17	SF301内土壌群出土陶磁器実測図（1）	33	Fig.36	1c層出土陶磁器実測図（1）	57
Fig.18	SF301内土壌群出土陶磁器実測図（2）	35	Fig.37	1c層出土陶磁器実測図（2）	58
Fig.19	SF301内土壌群出土陶磁器実測図（3）	37	Fig.38	南東端落込み出土陶磁器実測図	59
Fig.20	SF301内土壌群出土陶磁器実測図（4）	38	Fig.39	SK104・106出土陶磁器実測図	59
Fig.21	3a層出土陶磁器実測図	39	Fig.40	水指および清朝磁器実測図	60
Fig.22	3d層出土陶磁器実測図	40	Fig.41	江戸時代の屋敷配置復元図	63
Fig.23	3c層出土陶磁器実測図	41	Fig.42	明暦元年「大坂三郷町絵図」部分	66
Fig.24	2層下面検出遺構出土陶磁器実測図（1）	42	Fig.43	明暦3年「新坂大坂之図」部分	66
Fig.25	2層下面検出遺構出土陶磁器実測図（2）	43	Fig.44	16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器変遷	69
Fig.26	SD201・202、SK202、SX302出土陶磁器実測図	45	Fig.45	枚方宿遺跡第3次調査出土の唐津焼とその 相伴遺物	71
Fig.27	2層、2～1c層出土陶磁器実測図	46	Fig.46	徳川初期の黒灰釉陶器	72
Fig.28	瓦類実測図	48	Fig.47	各時期の遺構と年代推定	75
Fig.29	石製品実測図	50	Fig.48	陶磁器層別組成グラフ	76

表 目 次

Tab.1	銭貨一覧表	51	Tab.3	天満本願寺関係年表	62
Tab.2	土師一覧表	52	Tab.4	陶磁器層別組成表	77

第Ⅰ章 調査にいたる経緯

大蔵省造幣局は、明治4年(1871)創業の造幣寮を前身とする大蔵省の特別の機関で、貨幣や勲章等の製造や旧貨の銷毀し等を行う国営企業である。

この程、造幣局では、構内の職員宿舍の老朽化に伴ってその改築を計画し(Fig.1)、大阪市の大規模建築物に関する事前協議の一環として大阪市教育委員会文化財保護課と埋蔵文化財に関する協議を行った。このなかで、文化財保護課は、当該地が天正13年(1585)、豊臣秀吉の許しを得て建立された天満本願寺跡に比定されることから、建築工事に先だって試掘調査を行うよう造幣局に依頼した。

試掘は、財団法人大阪市文化財協会の手によって、1994年度建設予定分の約430㎡に対し、1993年11月18日・同25日の2回にわたって行われた。その結果、現地表面下約1.5mで大坂冬の陣に伴うものと見られる焼土層が残存していること、また焼土層の残存が認められない地点でも豊臣時代の生活面が良好な状態で残っていることなどが確認された。

この結果にもとづき、文化財保護課は「文化財保護法第57条の6」による遺跡発見の通知、およびそれにもとづく本格的な調査の実施についての事前協議が必要であるとの見解を、造幣局に提示した。造幣局では、これを受けて平成5年12月10日付で文化庁長官宛「遺跡発見の通知」をする一方、調査の実施方法などについて大阪市文化財協会と打ち合わせを重ねた。その結果、発掘調査を平成5年度中に実施し、その報告書作成業務を平成6年度中に実施することで両者の合意が成立し、それぞれ年度ごとに契約して実施することとした。

(中村博司)



Fig.1 調査地位図

第Ⅱ章 遺跡の歴史的環境と大坂城下町跡の調査状況

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

大阪市内の中心部を南北に貫くように洪積台地である上町台地が位置している。台地の東側には大和川・淀川などの沖積作用により形成された河内低地が、西側には大阪海岸低地が広がる。このうち西から北にかけての台地に接する部分、天満から船場・島之内をへて難波・粉浜にかけての地帯は、わずかに標高が高い。この地帯は今から約六千年前の縄文海進のころに、沿岸流により運ばれた砂と西風に吹き寄せられた砂とによって形成された砂堆で、北部を天満砂堆、南部を難波砂堆と称している。砂堆上の土地は周辺の低地に比べて水害などの危険が少ないことから、台地上の地域と同様に早くから人々の生活が営まれていたようであり、東淀川区崇徳寺や北区豊崎神社境内〔伊藤純1990〕で弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺跡が確認されている。

古代における難波は、瀬戸内海の東端に位置し、大和川・淀川を通じて畿内の中心部に結び付くという地の利に恵まれた交通の要地であった。そして、その重要度を飛躍的に高めたのが、『日本書紀』仁徳天皇11年の条に見られる「難波堀江」の開削である。この「難波堀江」は、天満砂堆を横切って上町台地の北縁を流れている現在の大川に比定する考えが通説である。堀江の開削により近接する上町台地北端部の重要性が高まり、周辺の開発が行われるようになった。1987年から90年にかけて行った中央区法円坂の調査で見つかった5世紀後半の倉庫群は、このような時代背景を反映したものと考えられる〔直木孝次郎・小笠原好彦編著1991〕。その後も法円坂付近には、孝徳朝の長柄豊碕宮に比定される前期難波宮、聖武朝再建の後期難波宮が造営されており、この地域の重要度の高さをうかがうことができる。

同様に堀江の北岸の地域も立地条件を活かした開発が進められたようである。この時期の堀江北岸に所在したと推定されているものに、東大寺領新羅江庄がある。奈良時代の難波は、国家の外交・経済・軍事の拠点として繁栄した。その中心である難波御津の位置に

については現在の三津寺付近、または高麗橋付近と諸説があるが、堀江の周辺には朝廷の施設ばかりではなく大寺院の倉・庄なども設けられていたという。新羅江庄もまた、西国にある東大寺の封戸や荘園からの物資の集荷や大陸との交易の拠点としての役割を果たしていたと考えられている。

延暦3年(784)に長岡京が造営され、これに伴って難波宮が廃止されると、難波の政治・経済的な地位は低下することとなった。また、延暦4年(785)には淀川と三国川(神崎川)の間に堀川が開削され、港湾機能の中心は淀川・三国川の分岐点に当たる江口(現東淀川区)付近に移っていった。しかし、難波の地は全く衰退してしまっただけではなく、その後も一定の地位を確保し続けていた。その中心となったのが渡辺津である。「渡辺」は大川兩岸の地域を指す地名で、このうち大川北岸が北渡辺、南岸は南渡辺と呼ばれていた。渡辺津の位置は、現在の八軒家から天満橋付近と推定されている。この地を拠点として中世に活躍したのが、渡辺党と呼ばれる武士団である。また、中世には「中島」の地名も用いられた。「中島」は、大川と長柄川および神崎川に囲まれた島状の地域を指す地名である。この地名が冠せられた代表的なものに中島天満宮(現在の大坂天満宮)がある。中島天満宮は、社伝によると天暦7年(953)に村上天皇の勅願で創祀されたのが始まりとされているが、中世になると様々な文献にその名を見い出すことができるようになる。周辺には門前町が形成されていたと考えられている。

戦国期の大坂の中心は石山本願寺であった。石山本願寺の前身は、明応5年(1496)に本願寺八世門主蓮如の隠居所として設けられた石山御坊である。天文元年(1532)には、法華宗・六角氏との抗争により本拠地山科本願寺が炎上し、本願寺は大坂に寺基を移している。これ以後、石山寺内が本格的に発展しはじめる。石山本願寺は現在の大坂城付近であったと推定されているが、対岸の天満地域にも石山本願寺の影響が及んでいたようである。天文元年、本願寺に従って興正寺が天満に寺基を移したと伝えられ、天満に居住した本願寺の門徒もいたという。なお、蓮如の末子である順興寺実従の日記「私心記」天文2年(1533)9月16日条に「天満森へ行、鞠ヶ候」とあり、この記事が文献上での「天満」の地名の初出とされている。石山本願寺は戦国期の畿内における一大勢力であったから、近辺はしばしば戦場となった。元亀元年(1570)には、織田信長と石山本願寺・三好三人衆との間で戦闘が行われたが、このとき織田方の陣が天満森に置かれたことが知られている。

天正8年(1580)、10年にわたる織田信長との戦いの末、本願寺は大坂を去り紀伊鷺森へ移った。その際寺内より出火し、石山本願寺は全焼したという。こうして大坂は織田氏の

手に移ったが、信長が本能寺の変(天正10年(1582))で倒れると、その地位を継承した羽柴秀吉がこの地を本拠地とした。秀吉により大坂城の築城が開始されたのは天正11年(1583)のことである。天満の開発は、大坂城築城の初期の段階から着手されていたようで、天満寺町の整備が天正11年頃から始められている。また、この地に京都の朝廷を移転させるという計画があったとも伝えられているが、これは実現しなかった[内田九州男1989]。

天正13年(1585)4月、紀州鷺森から泉州貝塚へ移っていた本願寺に対して、秀吉から摂津中島に寺地を与えるとの沙汰があった。秀吉は、寺地の測地にあたり自ら出向いてこれを行ったと伝えられるほどこの移転に積極的であったという。本願寺は8月4日から阿弥陀堂の建立に着手し、8月30日には門主顕如が貝塚から天満に移っている。寺内の範囲は、中島天満宮の会所から東の川岸まで東西7町、南北5町で、もとの石山寺内よりも「ことのほか広」かったと伝えられる。寺内町には北町・南町・西町・上町・市場町・市場東町・五日講町・サイカ町・長柄町・樺斎町などの町があり、坊主衆・門徒衆をはじめ様々な職種の人々が居住していた。本願寺の御坊は参詣者で賑わったという。このように本願寺の天満への移転は、門徒衆の「民活」による町場の発展が意図されたものであった。しかし、防禦用の堀や堀を設けることは禁じられていた。また、天正17年(1589)には、秀吉の勘気を蒙った者が寺内に潜伏していたことが発覚し、彼らをかくまっていた町人が処罰され、町は焼き払われるという事件が起こっている。この事件の結果、本願寺は秀吉の奉行である増田長盛・石田三成に対して起請文を提出し、寺内の掟が定められ、寺内の検地も行われた。このように天満寺内町は、政治権力の支配下に組み込まれていったという点で、それまでの寺内町とは本質的に異なっていた。

天正19年(1591)正月、秀吉は再び本願寺に対して京都への移転を命じた。移転先は六条堀川と決まり、同年8月に本願寺は京都に移っていった。天満にあることわずか7年であった。これに従って天満から京都へ移住した門徒衆はかなりの人数であったと伝えられる。しかし、天満に残った人々も少なくなかったようである。その中には海外交易に従事する大商人なども含まれていた。本願寺の移転後も市街地の整備は進められ、慶長3年(1598)には東横堀川に相対する位置に天満堀川が開削されている。またこの時期の天満には、黒田・織田(信雄)などの大名屋敷が置かれていたという。慶長19年(1614)の大坂冬の陣の時、天満は大坂城に対する北からの侵攻路に当たっていた。龍城を決めた豊臣方は、天満・船場に火を放ち焼き払っている。

慶長20年(1615)、大坂夏の陣に敗れ豊臣氏は滅んだ。戦後、大坂城主として入城した松

平忠明は、天満川崎に徳川家康を祭神とする東照宮を勧請している。現在の滝川小学校の位置にあたる。元和5年(1619)に松平忠明は大和郡山に転じ、大坂は幕府直轄領となった。天満の市街地が大坂三郷に組み込まれたのはこの頃である。天満には町屋以外に様々な武家屋敷が置かれた。寺町の北側には大坂町奉行所の与力・同心屋敷、大川沿いの地区には与力屋敷のほか幕府の材木蔵や材木奉行(のち破損奉行)屋敷、津藩(藤堂家)や岸和田藩(岡部家)の蔵屋敷などがあった。このうち材木蔵の北半分は、寛政元年(1789)に救荒用米を備蓄するための米蔵に作り替えられている。

慶応4年(1868)、徳川幕府が倒壊し、旧幕府の所有地は明治政府に接収された。近代国家にふさわしい貨幣制度確立のために新たな造幣工場の建設を計画した明治政府は、その建設地として天満川崎の旧幕府材木蔵・与力屋敷等の跡地を選んだ。同年、造幣局の建設に着手し、明治4年(1871)より操業が開始されている。

第2節 大坂城下町発掘調査の現状(Fig.2)

大坂城跡の発掘調査が本格的に開始されたのは第二次大戦後のことである。1980年代前半までの調査は豊臣氏大坂城三の丸の内側に限定されていたが、1985年に初めて惣構部分での調査が行われ、翌1986年には船場城下町の調査が開始されている。以下、これまで行われてきた大坂城下の発掘調査の現状について概観する。

はじめに、大坂城跡の発掘調査における時期区分について簡単に触れておく。大坂城跡の調査では、整地の繰返しによる複数の整地層・遺構面が確認される場合が多い。それらのうち遺跡の全般で確認される地層を指標として大坂城跡の時期区分が行われている。指標となる地層は、記録に残っている火災や築城に伴う大規模な開発などと対照することによって、それぞれ年代が与えられている。一般的な時代区分とは異なり、遺跡を解釈する上で設定した時期区分である。

石山本願寺期	本願寺創建(明応5年(1496))から本願寺焼亡(天正8年(1580))まで
豊臣前期	大坂城三の丸築城開始(慶長3年(1598))まで
豊臣後期	大坂夏の陣(慶長20年(1615))まで
徳川期	大坂夏の陣以降

第一の画期は天正8年(1580)の石山本願寺焼亡である。大坂城築城開始(天正13年)までの期間は豊臣前期に含む。第二の画期は、慶長3年(1598)に開始された三の丸の普請である。その際、「町中屋敷替」と称される町屋・寺院の移転が行われ船場城下町が整備されるなど大規模な整地・開発が実施された。秀吉がこの慶長3年に没しているため、豊臣前期が秀吉の時代、後期が秀頼の時代には相当する。第三の画期は慶長20年(1615)の大坂夏の陣である。この時に生じた大規模な火災による焼土層は、削平を受けていない限り大坂城跡のあらゆる地点で確認することができる。なお、天満・船場については前年の大坂冬の陣で焼けたとされている。また、現在ではそれぞれの地層から出土する遺物の認識が進み、出土遺物による年代の把握が可能になっている。

これまで行われた城下町の調査は、上町地域と船場地域が中心である。

上町地域は、文禄3年(1594)に建設された惣構の内側の地域である。惣構築城後は城内となるが、それ以前からすでに城下町としての整備が進んでいたと考えられる。慶長3年の「町中屋敷替」では三の丸築城のために町屋の移転が強制されたが、東横堀川付近の調査

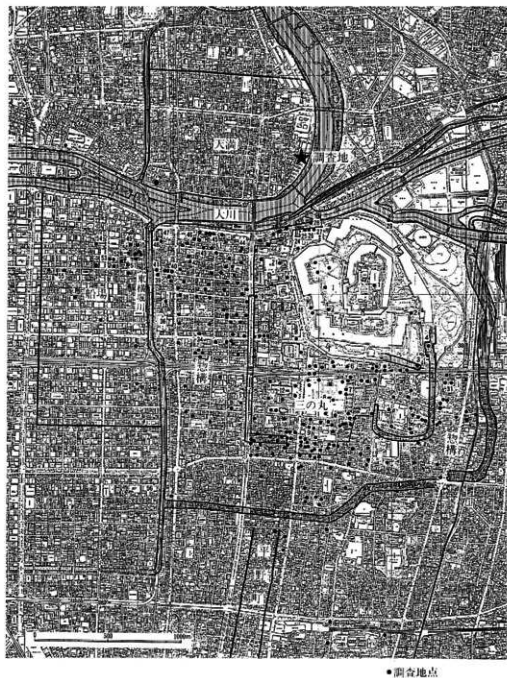


Fig.2 大坂城跡・城下町跡の主要調査地点

でこの時の整地と考えられる厚い盛土層が確認された例があり、三の丸部分に限らず惣構より内側全範囲で城下町再編がなされたものと思われる。豊臣期の遺構はこの地区の全域で確認されるが、特に台地から下がった西部の松屋町筋周辺、北部の土佐堀通周辺で豊臣期の遺構面が良好に残されている場合が多い。土佐堀通周辺では夏の陣で被災した武家屋敷跡が確認されており、この地区には武家屋敷が建ち並んでいたと考えられる。また、松屋町周辺の調査では、道路とそれに面した町屋が検出された例がある。三の丸地域でも、豊臣前期の町屋が確認されている。

船場は「町中屋敷替」の際に立ち退きを命じられた町屋の移転先として整備された地域である。調査は特に北部の高麗橋・道修町周辺に集中しており、豊臣期から徳川期にかけての複数の遺構面が確認されている。この地区では、魚名を記した木簡が数百～数千点の単位で出土するなど、大坂の陣の前後に存在した魚市場に関する手がかりが得られている。また、豊臣前期には城下町整備後の町割とは異なる方位をもつ建物が建てられていたことなどが確認された。豊臣期の遺構は船場の南、および西に行くほど密度が薄くなる傾向があり、船場の中でも開発時期に差のあることがうかがえる。さらに、御堂筋に近い平野町3丁目付近では、弥生時代にはすでに陸化しており、生活が営まれていたことが明らかにされている。

このほか初期の城下町には平野町がある。現在「平野町」の地名は船場に所在するが、ここという平野町は大坂城から四天王寺に向かう南北の道筋に沿って形成された町で、上町筋と谷町筋の間に位置している。ただし、これまでの調査件数は少なく、城下町に係わる遺構の検出事例もわずかである。

天満地域は、これまで遺跡としての位置づけがなされていなかったため、本格的な発掘調査が行われてこなかった。豊臣期大坂については、文献史料のみでは明らかにしえない部分が多く残されている。上町地域や船場地域の姿が調査成果の蓄積によってしだいに明らかにされてきたように、天満地域における発掘調査にかかる期待は大きい。

(豆谷浩之)

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査は、1993年12月末に大阪市文化財保護課職員立会いのもとに徳川初期の整地層上部まで重機で掘削した後、翌年1月5日より当協会が担当して本格的に開始し、2月末日に完了した。平面的に調査したのは、徳川初期整地層上部から新造幣局宿舍の工事敷の深さ、つまり豊臣前期と推定される整地が行われる前段階の遺構面(第6層上面)までで、それ以下については調査区中央に6m×4mのトレンチを設けて地層の観察などを行った。調査区の地区割は10m四方を一区画とし、[X=-145,010m Y=-43,570m]を起点として南北ラインにアルファベット、東西ラインにアラビア数字を冠し、その北東交点名を地区名とした(Fig.4)。

以下、調査結果の概要について述べる。調査区における中世後半から近世末までの遺構の変遷過程は、大きく三つの時期に分けられる(Fig.3)。

I 期

豊臣前期と推定される整地(5層)が行われる以前の段階である。この時期の遺構は多くなく、明確な建物跡などは見られない。大川べりの当地は、恒常的な居住に不向きな低地であったと考えられる。整地直前の地表面は、調査区の北西から南東の大川側に向けて緩やかに傾斜していた。出土遺物は15世紀以前のものが多いが、整地後の遺構と位置や方向において強い関連を示している一部の櫓や溝は豊臣期まで降る可能性がある。

II 期

上記の整地が行われSB501が建てられて以降、それが廃絶するまでの時期である。調査地が天満城下町の一角として開発された画期と捉えられる。この時期は建物の北側が溝であったとき(II-1期)と道に変わって以降(II-2期)の二つの段階に分けられる。まず整地は建物に沿って北側約5mの間は行わず、その部分はSD501となる。整地によって前段階の緩傾斜面は解消され、SB501が建てられる範囲は平らになり、その南東は大川へ向けて

急に低くなる。やがてSD501は埋められるが、最初は建物に沿った幅1m弱の範囲にとどまり、次に砂によって完全に埋められる。SD501が埋められた上にはいねいな整地を行い、道路SF301が造られる。道路にはゴミ捨て用の穴が多数掘られると同時に整地が繰返され、最終的には道路面が屋敷地より高くなる。またSB501の南東辺では大川側へ整地部分を拡張し、敷地を画するようなし字形の溝が設けられる。ここで大坂冬の陣(1614年)を迎え、SB501は焼亡したと推定される。SB501を覆って焼土層が分布するところがあり、礎石の一部が火を受けている。溝や道路の北側の敷地での建物の有無などについては、調査範囲が狭くて不明である。

Ⅲ期

SB501廃絶後の徳川期である。SB501廃絶後、再び盛土され屋敷地と道路の高低差がなくなるが、南東端の落込みはそのまま残る。少なくとも明暦年間以降、調査地は幕府の材

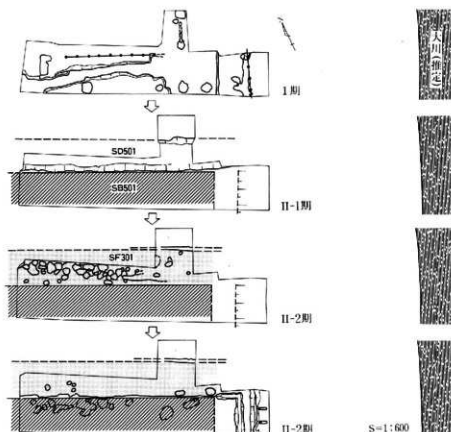


Fig.3 道構変遷概略図

木蔵や材木奉行屋敷などの一部であったが、今回の調査ではこの時期の遺構面を平面的に調査することはできなかった。ただし、再度の盛土が行われ南東端を含めて調査区全体が平らになった段階で、大川側に4基余りの大型の石組を据えた土壇が設けられ、それらの施設との関係が想定された。

第2節 層序(Fig.4)

第1層：徳川期の地層を一括して1層とする。1c層は大坂の陣後最初の整地層にぶい黄色(2.5Y6/4)シルトから成り、層厚は20～45cm。1a層と1b層は、南東端の落込みが完全に埋められて全体が平らになった段階を境に上を1a層、下を1b層と呼ぶ。1c層は大坂の陣後から初期伊万里の出現前、1b層は17世紀後半と推定される。

第2層：大坂冬の陣(1614年)の際に形成されたと推定される焼土層で、層厚は5cm以下。西端の4G・4F区に分布する。建物内や東の傾斜面では同一の層準で炭や焼土が散布しており、2層と同じものである可能性が高い。

第3層：5層と2層、または4層と2層の間に各所で形成された豊臣後期の整地層を一括して3層とする。3a・3b層は5cm前後の厚さのシルトや粗砂の薄層を重ねた整地層である。分布は下層のSD501のあった場所と同じで、道路(SF301)と考えられる。層厚は最大45cm。本層形成の途中で多数の土壌が掘られるが、それらがほとんどない上層を3a層、集中して掘込まれる下層を3b層とした。3c層は5C・6C区に分布するシルト混暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂で、層厚は最大65cm。前段階の5層による整地を大川側へ拡張したものである。3c層は4層より新しいが、3a・3b層との関係は不明である。3d層は5層と2層に挟まれ4G～5E区に分布する。層厚は30cm以下で、ぶい黄褐色(10YR4/3)シルトから成る。3d層と3a～3c・4層との関係はわからない。

第4層：SD501の埋土で、明黄褐色(2.5Y5/4)中・粗砂から成る上層の4a層と、オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトなどから成る下層の4b層に分かれる。4b層は主にSD501の南斜面に存在する。

第5層：灰黄褐色(10YR5/2)や黒褐色(2.5Y3/1)粘土のブロック・オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂礫・黄灰色(2.5Y5/1)シルトなどから成る整地層である。北西では55cmと薄く、南東にかけて厚くなって最大140cmあるが、南東端にはない。豊臣前期と推定される。

第6層：灰オリーブ色(5Y4/2)～オリーブ黒色(10Y3/1)粗砂混り粘土の6a層と黒褐色(2.5Y3/1)粘土の6b層からなる水成層で、層厚は130cmである。6層からは12～13世紀頃の陶磁器・瓦器などが出土した。

第7層：TP-0.7m以下に堆積する水成層で、黒色(7.5Y2/1)粘土混り粗砂～小礫からなる層厚70cmの7a層と、オリーブ黒色(5Y3/1)砂礫からなる層厚40cm以上の7b層から成る。

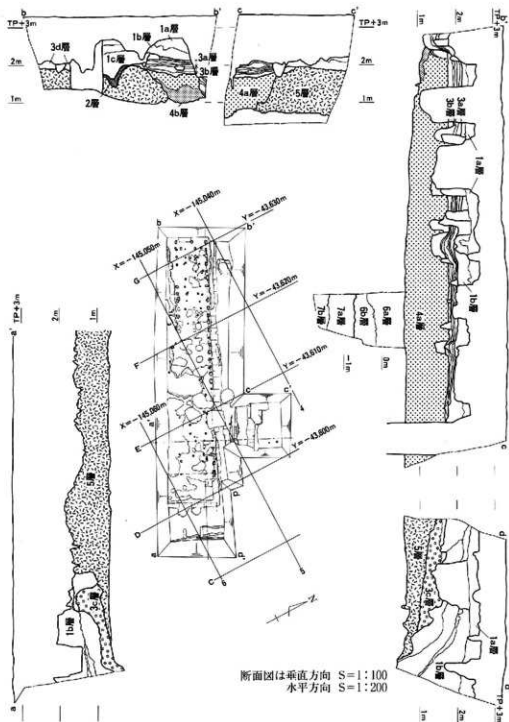


Fig.4 北・西・南壁断面実測図

第3節 豊臣期整地前(I期)の遺構と遺物

1) 遺構(Fig.5 図版2)

豊臣期の整地の前段階、6層上面で検出した遺構で、溝・溝・土壌などがあった。中央部のSA602は長さ14.30m、8間分(1間の平均長1.79m)が検出され、方向は北で西へ66°振っている。攪乱のある南東へはあと2間延びる余地がある。掘形は直径0.20~0.40m、深さは0.4m内外のものが多く、残存していたものや柱痕跡から推定できる柱の直径は7cm前後で、0.60mの深さまで入っていたものがあつた。SA601は長さ5.30m、3間分(1間の平均長1.77m)が検出された。方向は北で東へ20°振っており、SA602とほぼ直交する。SA601は北と南へ延びていた可能性がある。掘形は直径0.15~0.20m、深さ0.20~0.40mであつた。SA601とほぼ平行する遺構にSD602がある。SD602は北で東に25°振った方向で直線的に調査区を横断しており、幅0.15~0.35m、深さ0.03mである。その東にもほぼ同方向のSD601がある。SD601は北側で二つに分かれ南では不定形になるが、中央部で幅0.90m、深さ0.15mである。4D区のSD603はSK606が埋まった後の溝で深さ0.08m、埋土には焼土や炭が入っていた。

4D区のSK604は一辺1.65m×約1.2mの長方形の土壌で深さ1.30m、その南のSK606は長さ1.50m、幅1.10mの楕円形に近い土壌で、円形に一段深くなっており、深さ1.15mであつた。SK604とSK606は6層上面で検出した遺構では深く、形態が整っていることなどから井戸の可能性もある。他には調査区の南西壁沿いに四つの土壌SK607・608・609・612が並ぶようにあつた。最大のSK612は長さ1.85m、幅1.60mで深さ0.45m、SK607~609は深さ0.20m以下である。北西端にあるほぼ長方形に近い平面形態のSK613は一辺3.25m×約1.5m、深さ0.40mあり、他の土壌が人為的に埋戻されたと推定されるのに対し、水成の砂で埋まっていた。また西半には、長さ約25m、幅1~2mの範囲で0.1~0.2m高い部分SX601があり、これは調査区を越えて西にも続いていたようである。SX601の上面は周囲に比べると締まっており、小道のようなものであつたのかもしれない。

以上で注目されるのは、同一方向の遺構の存在である。それは溝と溝の他、土壌の配置にもうかがうことができる。大きくみると、これらの方向は調査地の南東を流れる大川の方

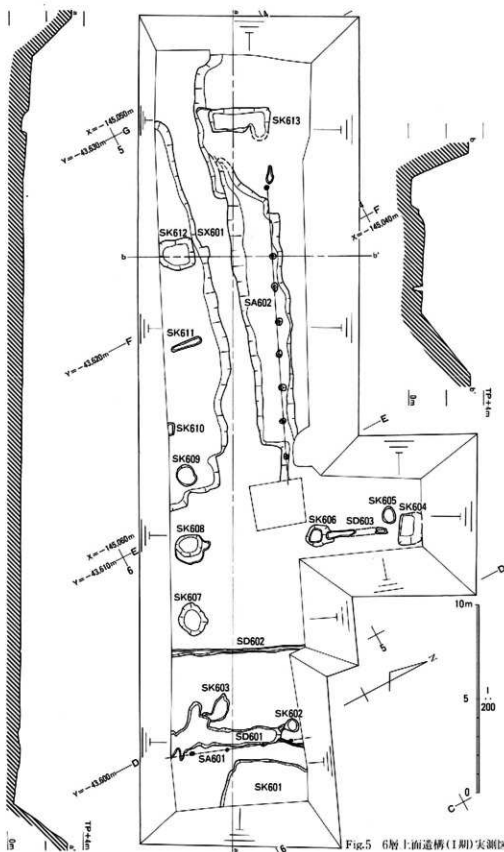


Fig.5 6層上面遺構(1期)実測図

豊臣前期と推定される整地(5層)後の遺構の方向とよく一致している点に注意される。SA602(北で西へ66°振る)・SD602(北で東へ25°振る)の方向は、整地後のSB501の北で西へ65°振った方向と正確に平行あるいは直交している。方向だけでなく、SA602の位置は整地後にSB501沿いに造られるSD501の南肩と一致している。また、SD602の位置はSB501の東妻の推定ラインに近い。SA602とSD602に見られる5層を挟んだ遺構の方向や位置の一致は、整地以降の町割と同じ方向をもった区画がそれ以前に既に存在しており、整地後の遺構の方向や配置に受け継がれた可能性が強い。SA602・SD602は僅少な出土遺物から時期を確定できないが、豊臣期まで降る可能性がある。

2) 遺物 (Fig.6、図版11)

1・2は6b層、3～8は6a層の出土である。1・2は玉縁口縁の白磁碗で、横田・森田分類のⅣ類にあたる[横田賢次郎・森田勉1978]。胎土中に黒い細粒が入り、2は口縁部に釉が垂下している。3は口縁部がかすかに外反する白磁碗で、胎土は灰色をおびる。4は瓦器皿、

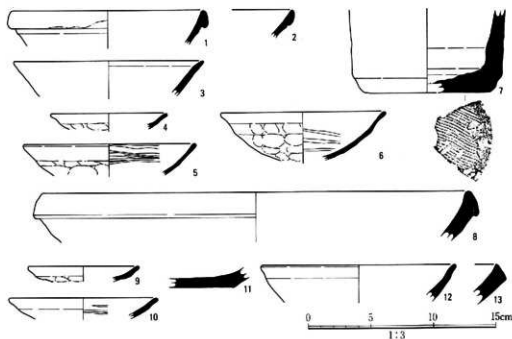


Fig.6 6層・6層上面検出遺構出土陶磁器実測図

6b層(1・2)、6a層(3～8)、SK601(9・10)、SK604(11)、SK609(12・13)

5・6は瓦器碗で、碗は尾上編年のIV-1期前後であろう[尾上実1983]。これらは、最近の瓦器の編年と年代観の趨勢からすると14世紀には降らないものである[森島康雄1992]。7は須恵質の焼成の瓶で底面はハケメが施され、8は瓦質播鉢で14世紀末から15世紀代に降るものであろう[広瀬和雄1981]。他に古瀬戸後期の灰釉大皿の体部破片が出土している。

9～13は6a層上面検出の遺構から出土した。9・10はSK601から出土した瓦器皿・碗である。10の瓦器碗は尾上編年のIV-3期前後であろう。11はSK604から出土した丹波焼大平鉢の底部である。12は古瀬戸期に多い灰釉平碗、13は備前焼播鉢でSK609から出土した。

6層や6層上面検出遺構出土の陶磁器は、5層出土陶磁器が典型的な豊臣前期のものであるのに対してかなり古い様相を示す。5層出土遺物との時間的な空隙は、遺物量の僅少さによるところが大きいと予想される。なお、管状土鍾13点と軒平瓦1点は次節でまとめて報告する。

第4節 豊臣期整地後(Ⅱ期)の遺構と遺物

1) 遺構

本節の遺構は、豊臣前期と推定される整地以降、整地に伴って建てられたSB501が廃絶するまでの時期であり、SB501の北側が溝であったとき(Ⅱ-1期)と道に変わって以降(Ⅱ-2期)の二つの段階に分けられる。

i) Ⅱ-1期(Fig.7・8、図版3～5)

Ⅱ-1期はさらに、溝の一部が埋められるときを境に二つの小期に分かれる。まず古いほうの段階から記述する(Fig.7)。

SB501は調査区の南東5D区から北西4G区へいたる建物である。SB501の桁行長は、東端を北側柱に残っている最東端の礎石までとすると29.60m(15間分、1間の平均長1.97m)以上、さらにその半間分東にある遺構SX501を礎石の根石とみると30.80m(15間半分、1間の平均長1.99m)以上となる。SX501は、長さ0.90m、幅0.50mの浅い凹みに10cm前後の石が集中しているものである。建物の西端は調査区外とみられる。梁行は調査区西端部で4.00m、2間分を確認できるが、それ以上は調査範囲外や攪乱のためにわからない。建物の方向は北で西へ65°振っている。SB501でもっとも残存状態が良好なのは北側柱の礎石列で、半間間隔に並ぶが、一部の礎石は抜取られていた。北側柱では大小の礎石が交互に置かれているところがあり、大型の礎石は40～65cm、小型は20～35cmの大きさである。それより南の建物内と推定される場所の礎石は小さく、最大45cm、多くは15～30cmである。これらも北側柱に対応して半間間隔に位置しているものが多いようであるが、調査区南側の旧造幣局宿舍の基礎などのため、北側柱を除く部位では失われている礎石が多い。礎石は自然石や割石を使用し、SX501を除くと据付けのための特別な地業は行われておらず、五輪塔や石臼などの石製品を転用した例も確認していない。また北東隅では、北壁基底部の粘土が長さ60cmにわたって残っており、壁の厚さは11cmであった。壁の痕跡は礎石の中央に取付いており、真壁であったと推定される。

SB501の北に沿ってSD501がある。SD501は掘った溝でなく、その間の整地を行わずに造られたものである。底の傾斜は整地前の6層上面とほとんどかわらず、3F区から4D区の25mの間で0.40m東へ低くなる。幅5.30m、深さは3F区で0.90m、4D区で1.30mである。北の肩を確認できる4D・5D区では、両肩から落ちて一旦、平坦な部分があり、さ

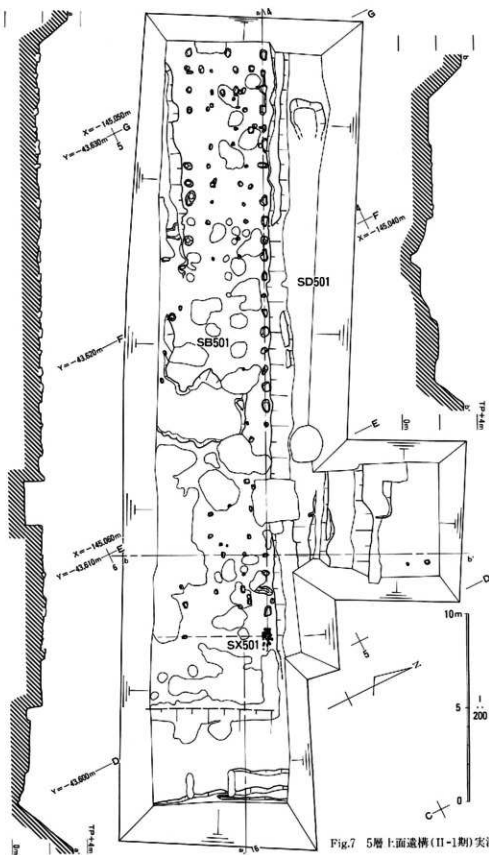


Fig.7 5層上面遺構(Ⅱ-1期)実測図

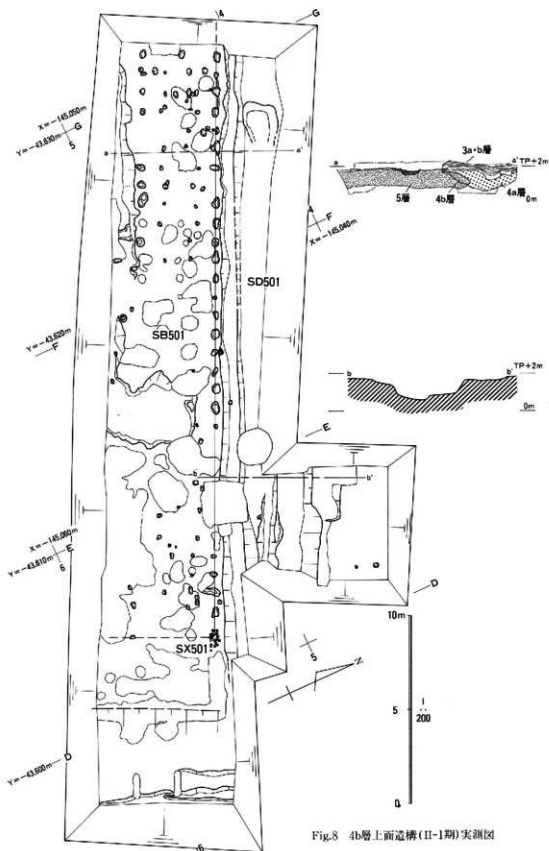


Fig.8 4b層上面造構(II-1期)実測図

らに中央部に幅約0.8m、深さ0.30mの一段深くなった溝があった。SD501の埋土はすべて人為的なもので、水成層は見られなかった。

SD501を挟んだ南と北の敷地を4D・5D区で比較すると、北のほうが約0.2m高い。北の敷地にも礎石らしき石があるが、建物の有無などは不明である。一方、調査区の南東端には5層による整地は及ばず、SB501の東側から大川へ向けて急に低くなって約1.5mの比高がある。その落ちの上端は、Ⅱ-2期に新たに南東部に設けられるL字形のSD201を境に5層の厚さが変わることから、後のSD201付近であったと推定される。

SD501は最初はSB501に沿った南斜面だけが埋められ(4b層)、次にきれいな砂(4a層)によって完全に埋められる(図版4・5)。4b層形成時には、溝の南半分は建物きわで0.20~0.30m落ちた後に比較的平坦な面ができる(Fig.8)。この平坦面は最小で幅0.30~0.40m、最大で0.70~0.80mあり、東へ向けて少しずつ低くなって続いている(4F区北西でTP+約1.6m、4E区南東で同1.4~1.5m、5D区北東で同約1.3m)。4a層と4b層の出土陶磁器には時期差が認められることから(Fig.15 第IV章第2節参照)、SD501は、4b層で埋められてから直ちに4a層によって完全に埋められたのではなく、ある期間は4b層形成時の状態で存続していたと考えられる。

ii) Ⅱ-2期(Fig.9~11、図版6~9)

SD501が完全に埋められて同じ場所に道路SF301が造られて以降、SB501が大坂冬の陣と推定される火災で廃絶するまでの時期で、豊臣後期に当たる。Ⅱ-2期の遺構には、2層焼土層が形成されるSB501廃絶時(遺構番号200番台)とそれ以前(遺構番号300番台)の二つの時期のものがある。まず後者の時期の遺構から述べる(Fig.9)。

SF301は、SD501の埋土上層である4a層上に薄い整地層を重ねて造られる。SF301の南辺はSB501で、SB501北側柱礎石の一部はその北端がSF301の整地上によって埋もれている。4D区では同様の整地が途切れたところに道路側溝と推定されるSD301があった。SF301の南辺からSD301の中心までは5.75~5.90m、北の肩までは6.00~6.05mあり、この道路は幅3間(1間1.98mとして5.94m)であったと考えられる。SD301は幅0.35~0.55m、深さ0.15~0.30mである。またSD301内には排水施設と考えられる瓦組みの遺構SX302があった(Fig.10、図版6)。SX302は5層を約0.2m掘込んで、完形の平瓦9枚を2段に立てて丸く組み、その中に石や瓦片を入れ上辺まで埋戻して石の部分のみが露出するようにしたものである。瓦組の直径は0.35m、深さは0.40mであった。また、SF301では約50基の土壇が検出された(図版6)。土壇は調査区の西半部に集中し、SF301のなかでは建物のきわに少なく、

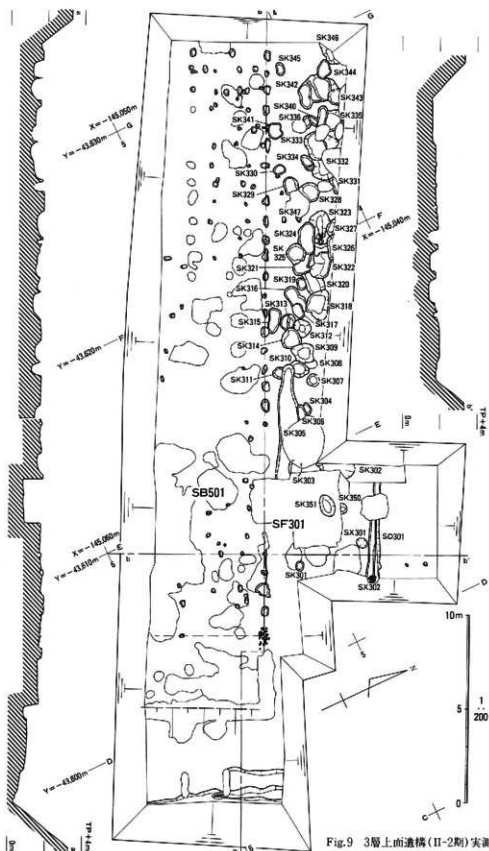


Fig.9 3層上面透構(II-2期)実測

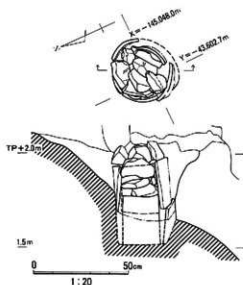


Fig.10 SX302実測図

1m以上離れた道路中央部に集まる傾向がある。これらの土壌は、埋土に炭や焼土を含むものが半数程度あり、他の遺構より遺物が多く出土することなどから大部分はゴミ捨て用の穴と推定される。また切合っていたものが多く、SF301整地層中の様々な面から掘込んでいたことなどから、繰返し掘っては埋戻されたものである。大きさは0.80～1.50m、深さは0.40～0.60mのものが多く、4 F区のSK333からは鬼瓦の一部と推定される金箔押瓦が出土している。SB501が火災に遭ったとき、これらの土壌はすべて埋まった状態で、その上に整地層

3a層があった。なお、4 D区のSK350・351は遺構面の残りが悪く、SK301～347と同じく道路整地層の中途から掘込まれていたかは不明で、埋土中の炭層の存在や位置が近いことから300番台の遺構に含めて報告したもので、2層段階まで降る可能性がある。

次に、SB501廃絶時と推定される遺構について述べる (Fig.11)。このときもSF301と側溝SD301は存続している。

SB501東の5 C・6 C区付近では、SD501が埋まって以降、最大厚65cmの盛土(3c層)を大川側へ継ぎ足して、L字形のSD201が造られる(図版9)。SD201は埋土に焼土片と10～20cmの大きさの石を多数含んでおり、火災後、SB501で使用されていた石などを投棄しつつ埋められたと推測される。その上限は、ベースとなった3c層出土遺物中にSF301整地層や調査区西部のゴミ穴群出土の陶磁器よりも新しく考えられるものが含まれることから (Fig.23-183の芙蓉手青花鉢)、SF301の造成などより遅れると推定される。SD201はSX501のすぐ東から始まり、SB501の北側柱ライン上をSF301に沿って4.20m東南東へ伸び、そこで南南西へ直角に折れて調査区外まで続いていた。その幅は0.85～1.30m、深さ約0.7mである。SD201の東には溝と平行して幅約1mの平らな部分があり、SF301へ続いている。

敷地東辺の斜面下には柱穴SZ201・202が南北に並んでいた(図版8)。斜面は2段になって落ちるが、柱穴の西には幅約0.3mのテラス状の部分がある。掘形は東西に長く、柱は斜面直下の西に片寄って立てられていた。SZ201は長さ1.40m・幅0.35m・深さ0.35mで、柱あ

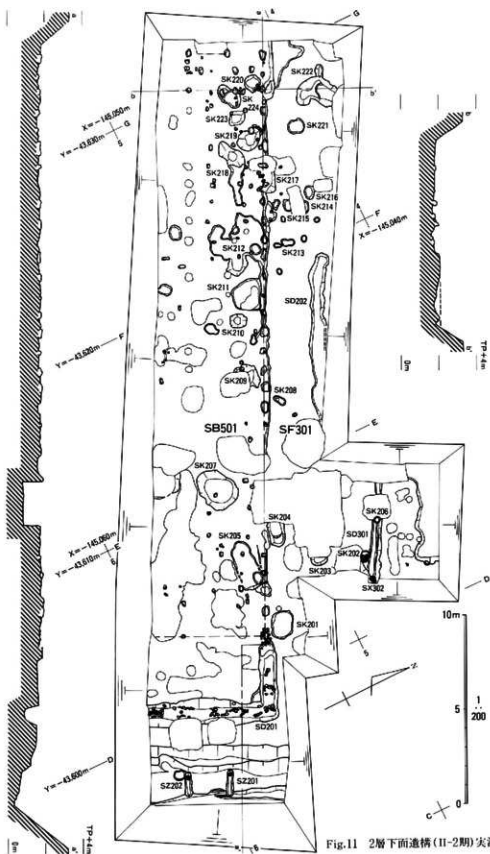


Fig.11 2層下面遺構(II-2期)実測図

たりの部分は直径0.16mで、さらに0.60m深くなっていた。SZ202も長さ1.30m・幅0.35m・深さ0.40mで、柱あたりの部分は直径0.20mで、0.25m深くなっていた。柱推定位置の心々間の距離は2.25mである。SZ201・202の掘形が東西に細長いことから、柱を支える横木を埋めていた可能性がある。これらは、大川側へ突き出した台あるいは階段などに係わるものであろうか。

以上の遺構以外に、2層下面で検出した土壌や2層と推定される炭層を埋土に含んだ土壌・溝がある(註1)。SB501内と考えられる場所の土壌は、SK207(深さ0.55m)を除くと形態が不定形で深くない。SK205は深さ0.05mで、北側に直径0.55～0.65m・深さ0.12mの円形の凹みがあり、SK211・212は深さ0.10～0.20mで、SK212の北にも直径約0.6mで深さ0.20mの円形の凹みがあった。これらの凹みは壁ぎわに位置し、大きさが類似している。桶などを埋置した痕かもしれない。SK209・218～220・223・224は深さ0.20～0.30mである。SK218～220と2層の間では接合する遺物が多く、SK218～220出土陶磁器は火災時を示す良好な資料である。SF301にある遺構は、下部のゴミ穴の影響で陥没したものなどで、2層形成以降にくぼんだものも多い。5D区の土壌SK201からは印章が出土した。またSK202～204は以上とは異なって深く、SK202には10～15cmの大きさの石数個が置かれていた。

iii) SB501について

SB501はプランがはっきりしないが、北側柱の通りや各部位での礎石の大きさの特徴から連続する1棟で、桁行15間(29.60m)または15間半(30.80m)以上、梁行は2間(4.00m)かそれ以上と推定される。廃絶後の整地層や溝埋土中の多数の石から、西側や東端部のように半間間隔で建物内の他の部分にも礎石があった可能性もある。建物内で多くを占める小型の礎石は床束か根太を置いたもので、床張りの部分が多かったと推定される。間仕切の位置などはわからない。

調査の速報では、①建物が細長い、②半間間隔の礎石の配置、③竈などが確認されない、などの諸点から倉の可能性を考えた[南秀雄1994]。しかし、①倉としてはあまりに建物が長い、②内部の礎石が小さい、③壁の痕跡から真壁で倉に一般的な大壁でなく、厚さも薄い、などの点から倉とするには無理があるようである。内部の礎石の規模や壁の特徴は、むしろ床張りの住居の構造を想定したほうが適当と考えられる。Ⅱ期を通じてSB501がある区画は、北がSD501またはSF301で、東が南東部の大川への落ちやSD201であった。SB501は、調査区の西や南へ続く屋敷地の北東外郭に位置する建物であったと考えられる。

敷地の外郭に位置し、細長い住居的な建物としては、江戸時代の上級の武家屋敷に見られる、屋敷地外郭を取巻いて遮蔽物としての塀の役割も合わせもつ長屋の可能性を挙げておきたい(註2)。SB501において北側柱の礎石列が特に立派なのは、北壁の塀のとしての本来の機能のためであろうか。

2) 遺物

i) 陶磁器

分類

美濃焼は出土量が少なく、ここでは天目碗・丸碗・平碗といった大分類以下は細分せず記述する。

唐津焼は本調査の施釉陶器のなかでもっとも多い。釉の種類に関しては、薬灰釉・灰釉・透明釉・鉄釉の4種のみの表現で記述する。薬灰釉と灰釉の違いは佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に確認していただいた。灰釉と透明釉の区別は当方によるが、透明釉は絵唐津にあるような胎土が透けて見えるものと呼び、そこで消去されたものを灰釉と記している。灰釉と透明釉の区別は、生産地での区分との齟齬や当方の誤りもあると思われるので、判断の基準としたものを掲載しておく(原色図版2)。胎土については、窯識別の手がかりになるような特殊なものに関してのみふれることにする。

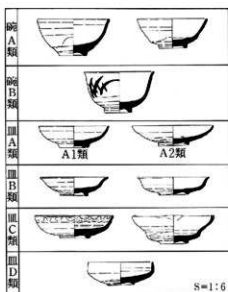


Fig.12 唐津焼碗・皿の分類

唐津焼の碗・皿は形態によって次のように分ける(Fig.12)。碗はA：口縁部が直口ないし内彎するもの、B：口縁部が外反するものに分ける。A・B以外にも茶陶と思われるもの、体部と口縁部がまっすぐ立上がる口径7~8cmのもの、小碗がある。皿は、A：口縁部が内彎するもの、B：口縁部が外反するもの、C：口縁部を变形させたもの、D：口縁部が90°に近く立上がるものに分ける。A類は、深いA1類と浅いA2類に細分する(註3)。A1類には鉄絵が施されたものが少量ある。C類には口縁部を波打たせた波縁皿と、口縁部を四角形などに近く

した向付がある。C類の釉は藁灰釉・透明に近い釉・鉄釉で、もっとも一般的な緑色を帯びた灰釉はなかった。またD類の出土数は少ない。皿には他に中皿・大皿がある。

青花は出土量が多くない。大坂出土の青花については、小野正敏氏らの分類と幅年[小野1982・1985]を基にした鈴木秀典・森穀の研究がある[鈴木1988・1990、森1992A]。ここでは個々の記述の後、森分類のどれに該当するかを示すことにする。

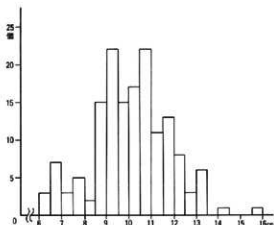


Fig.13 土師器皿口径分布図

土師器皿についても森穀の分類があつて[森1992A]、まず口径からA:7cm前後、B:9~11cm前後、C:12~13cm前後、D:14~15cm前後、E:15cm前後に分けている。D・Eは出土個体数が少ないが、A~Cの区分は本調査例でも有効と考えられたので、これにしたがって報告する(Fig.13 註4)。成形・調整手法でも分類されているが、本調査例はそのなかの3類、「端部を丸くおさめるもの」が圧倒的に多い。

5層出土陶磁器(Fig.14、図版11)

14は美濃焼の鉄釉天目碗、15は鉄釉天目碗の内反り高台である。16・17は美濃焼の灰釉丸碗である。18は口縁部に輪花にした白磁皿で、高台部は露胎である。19は小片で器形はわからないが、中国製の青白磁あるいは白磁と思われるもので、底部外面は露胎である。

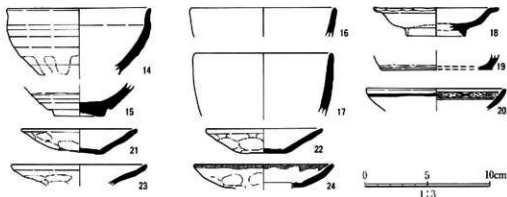


Fig.14 5層出土陶磁器実測図

20は口縁部が内彎する陶胎の粗製青花皿で、口縁内面に四方棒文が描かれる(皿Ⅲb類)。土師器皿はB類で、21・22には煤が付着していない。5層出土陶磁器は、大坂の陶磁器福年という豊臣前期の組成を示している[鈴木秀典1990・1991、森穀1992B]。

4b層出土陶磁器(Fig.15、図版12)

25は美濃焼の鉄釉天目碗で、14に比べて口縁部のくびれが強く、器高が低い。26・27は軟質施釉陶器碗で同一個体と考えられる。外面を白化粧し、端部に銅緑釉が掛かる。内面の釉はほとんど剥離しているが、黒色を呈していたようである。胎土は赤褐色で、底部が2～3mmと薄い。28はそぎのある青磁皿で、釉は高台内側まで掛かり、底部外面は露胎である。29は陶胎の粗製青花碗で、外面に太線で草花文が描かれる(碗Ⅱ類)。30は中国製色絵碗で、赤・青・黄緑・黒の4色で上絵付けを行って草花を表している。31は信楽焼壺、32

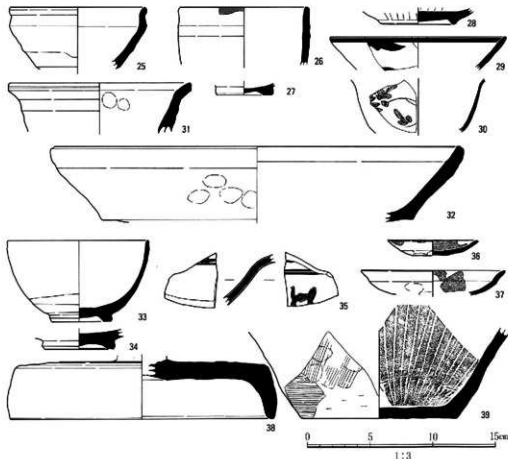


Fig.15 4層出土陶磁器実測図 4b層(25～32)、4a層(33～39)

は丹波焼大平鉢である。4b層出土陶磁器は、26・27の軟質施釉陶器碗を除いて豊臣前期の組成を示している。

4a層出土陶磁器(Fig.15、図版12・13)

33は灰釉の唐津焼碗A類で、34は灰釉の唐津焼皿の底部である。34は灰白色を呈した緻密な胎土で、特殊なタイプである。35は大型の青花罽皿の破片で、粗製である(大皿Ⅱb類)。36・37は土師器皿のA類とB類である。38は蔵骨器にしばしば転用される土師器火消し壺の蓋で、この蓋に組合う壺は大阪市中央体育館地域の調査では豊臣後期の遺構から出土している[大文協1992]。内面と口縁部外面はヨコナデ、天井部は外面の外側に弱いケズリが見られ、内側はナデ調整である。つまみは外れて、接合のために付けられた溝が残る。また内面には口縁端まで煤が付着している。39は丹波焼播鉢で、外面にハケメとケズリが残る。4a層出土陶磁器は豊臣後期の組成を示している。

3b層出土陶磁器(Fig.16、図版13)

40・41は美濃焼丸碗で、40は鉄釉、41は灰釉である。42は灰釉の美濃焼小碗で、43は灰釉の美濃焼(黄瀬戸?)向付である。44・45は唐津焼皿A1類、46は皿A2類、47・48は皿B類、49は底部破片で、47は透明釉、49は鉄釉、他は灰釉である。48には胎土目があり、体部外面に重ね焼きの痕が残る。50は皿C類の波縁皿で、釉は白く濁っている藁灰釉である。51・52は口縁の4ヶ所をくばせた皿C類で、51が鉄釉、52は淡緑色釉を流し掛けにしている。53はそぎのある青磁皿で、4b層出土の28と同じタイプである。54は青花皿・55は青花碗(碗Ⅳ類)である。54は粗製で内底面を蛇ノ目釉剥ぎし、高台は露胎である(皿Ⅲb類)。56は焼塩壺蓋で、57は土師器皿A類、58・59はB類、60・61はC類である。62は土師器鉢で内面にはハケメがあり、内面から口縁部にかけて煤が付着している。63は備前焼鉢で外面の体部下半と底部はヘラケズリで、上半に三本の線が刻まれている。64は備前焼、65は丹波焼の播鉢で、65の外面にはハケメが残る。

SK305～346(SF301内土壌群)出土陶磁器(Fig.17～20、図版14～16)

66・67はSK305出土で、66は灰釉の唐津焼碗A類、67は52と同じタイプの皿C類で、濃緑色の釉を流し掛けしている。

68はSK306出土の藁灰釉の唐津焼碗A類である。端部はやや内に巻くように終わっており、灰白色で非常に精良な胎土が特徴的である。岸岳系唐津の一窯、東松浦郡浜玉町の山瀬窯の製品と推定される(註5、原色図版2の藁灰釉左下)。

69・70はSK307出土である。69は鉄絵が施された唐津焼向付で、70の備前焼播鉢では重

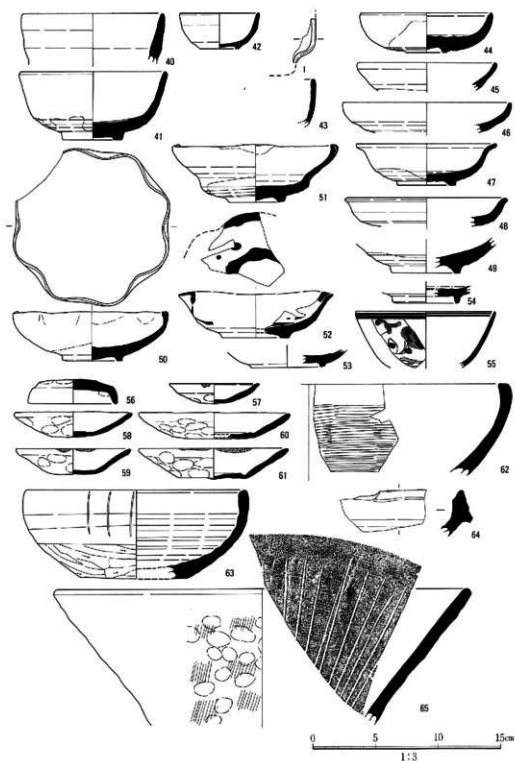


Fig.16 3b層出土陶磁器実測図

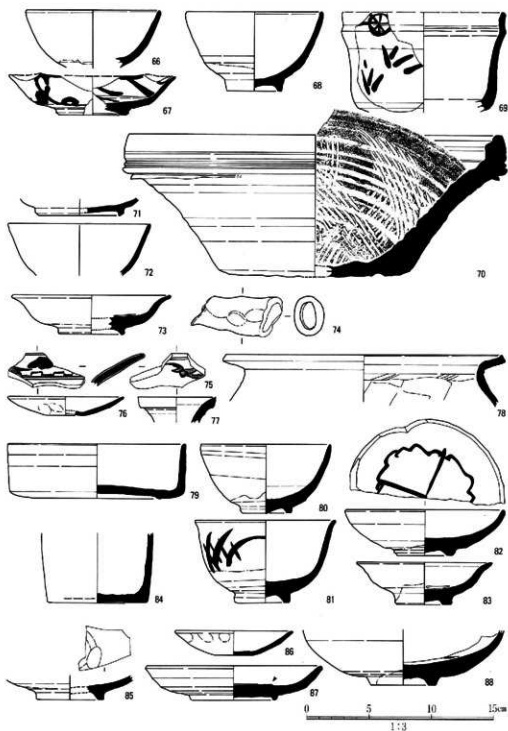


Fig.17 SF301内土坑群出土陶磁器実測図(1)

SK305(66・67)、SK306(68)、SK307(69・70)、SK309(71・72)、SK313(73・74)、SK312(75~78)、SK314(79~84)、SK316(85)、SK318(86~88)

ね焼きの痕跡が明瞭に残っている。

71・72はSK309出土の白磁皿と碗で、71は高台畳付の軸を掻取る。

73・74はSK313出土の唐津焼皿B類と注口である。両者とも透明釉で73には砂目がある。

75～78はSK312出土である。75は大型の青花鈐皿の破片で(大皿Ⅲb類)、4a層出土の35と同一個体の可能性がある。76は土師器皿B類、78は大和型土釜、77は備前焼徳利の口縁部である。

79～84はSK314出土である。79はほぼ完形の灰志野向付で文様はなく、底部の内面に円錐ピン痕、外面にワトチ痕が残る。80～83は唐津焼で、80は碗A類で灰釉、81は鉄絵のある碗B類である。82は見込に鉄絵が描かれた皿A1類、83は灰釉の皿B類で、内底面に3個の砂目があり、高台にも砂目が残る。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として再利用された可能性もある。84は備前焼の掛花生と思われる。

85はSK316から出土した唐津焼皿底部で、内底面と高台に砂目がある。釉は透明に近い灰釉で、胎土は灰白色で普通のものより緻密である。磁器的な感じがする特徴的なタイプである。

86～88はSK318出土である。86は土師器皿B類、87は美濃焼灰釉の丸皿で、内底面は釉をぬぐい取り、外底面にはワトチ痕が残る。88は絵唐津の皿底部である。

89～91はSK321出土の唐津焼皿である。89は藁灰釉の小型の皿で、一応、A1類に含めるが、この形態は一点のみである。90は灰釉のA1類で、高台と外底面に多量の砂が付着しており、砂敷で焼成されたと推測される。91は皿底部で、釉は透明釉に近い灰釉、胎土は灰色で緻密である。釉や胎土の特徴はSK316出土の85と似る。

92～97はSK325出土である。92は小型の美濃焼灰釉丸皿で、底部外面に3個のトチン痕がある。93は79と同様の灰志野向付である。94は唐津焼皿A2類、95は皿底部で内底面と高台に3個の砂目が残る。94・95は透明釉である。96は土師器皿B類、97は備前焼徳利である。

98はSK327から出土した唐津焼皿A1類で、灰釉である。

99～101はSK322・323出土の唐津焼皿である。99はB類、100はA1類で鉄絵があり、両者とも透明釉である。99の高台には砂が付着している。101は皿C類の皮鯨手波緑皿で、藁灰釉である。このような皿は、岸岳系唐津の東松浦郡北波多村帆柱窯などで多く出土している。

102～107はSK328から出土した。102は透明釉を掛けた唐津焼小碗で、底部内面に3個

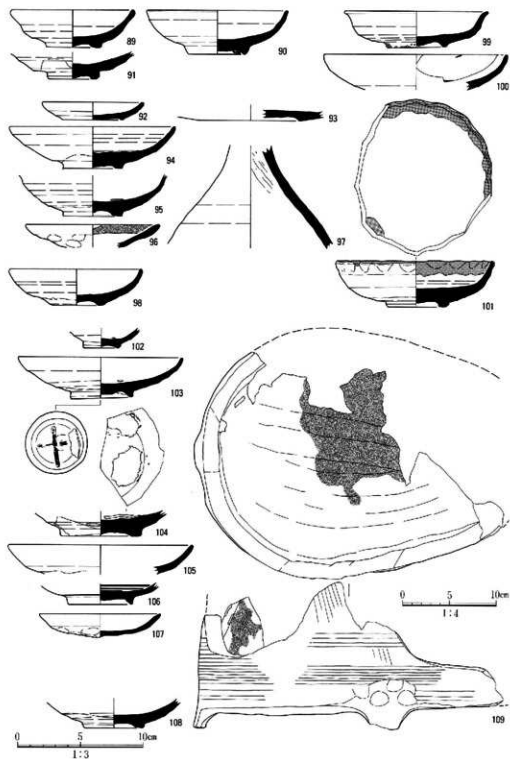


Fig.18 SF301内土壌群出土陶磁器実測図(2)

SK321(89~91)、SK325(92~97)、SK327(98)、SK322・323(99~101)、SK328(102~107)、SK333(108・109)

の小さな胎土目がある。103～105の唐津焼皿では103・104が皿A 2類である。103の内底面には3個の胎土目があり、底部外面には墨で十字形が書かれている。また、104の内外には大きな砂目残り、胎土は他に比べて緻密である。103～105は灰釉で、103以外は透明に近い。106は底部内面を蛇ノ目釉剥ぎした粗製の青花皿で、底部外面に砂が付着している(皿皿b類)。107は土師器皿B類である。

108・109はSK333出土である。108は透明釉の皿底部で、内外面に3個の砂目がある。109は足が付く土師器移動式竈で、外面に粗いハケメがある。

110～113はSK332出土である。110は灰釉の唐津焼碗底部、111は灰釉の皿B類である。111の内外面には大きな砂目が残る。112は土師器皿C類、113は備前焼徳利である。

114～117はSK335出土で、114～116は唐津焼、117は青磁皿である。114は皿A 2類で透明釉が掛かる。胎土は緻密で、表面に黒褐色の小斑点が浮き出している(原色図版2の透明釉左上)。このような特徴は岸岳系唐津の唐津市小十窯の製品で見られる[唐津市教育委員会1988]。115は皿D類で透明釉、116は灰釉である。117にはそぎが入り、高台部は露胎である。

118～120はSK334出土の唐津焼である。118・119は灰釉の碗A類、120は皿B類で透明釉である。

121～124はSK341出土で、121が志野焼皿、122が唐津焼灰釉の皿A 2類、123が青花皿小片である。124は丹波焼摺鉢である。

125～137はSK342出土で、125～132が唐津焼である。125は碗A類、126は小振りの碗で両者とも灰釉である。127・128は皿A 1類、131・132は皿B類、129・130は皿C類である。127・128は灰釉で、128の高台には砂と小粘土塊が付いている。131は灰釉、132は透明釉で、132の内底面には胎土目がある。129は絵唐津向付、130は藁灰釉の皮鯨手波緑皿である。133は青花小碗で底部が饅頭心になる。134・135は土師器皿B類、137は瓦質火鉢で体部に円孔がある。内面はナデで、外面は磨いている。

138～141はSK346出土である。138・139は土師器皿B類、140は唐津焼皿A 2類で、透明に近い灰釉である。141の摺鉢(図版15)は本調査で1点のみの出土である。口縁部は凹線のない縁帯がめぐり、6本単位の摺目が、1周目は縦方向に近く、2周目は斜めに2重に施されている。成形はタタキにより、口縁部内面に同心円の当て具痕跡、体部外面に平行のタタキメが観察される。底部は円板状である。体部の厚さは7～8mm、底部は4～5mmである。口縁部には鉄錆、他の部分には淡緑色の釉が掛けられ、胎土は灰白色で精良である。

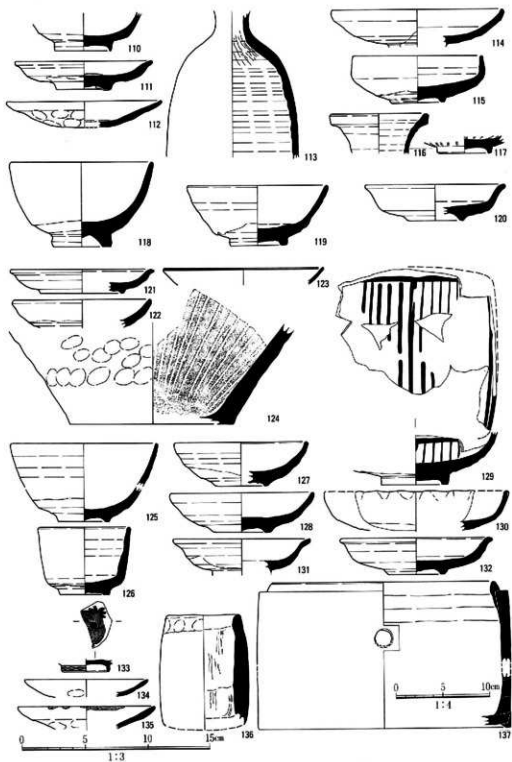


Fig.19 SF301内土壇群出土陶磁器実測図(3)

SK332(110~113)、SK335(114~117)、SK334(118~120)、SK341(121~124)、SK342(125~137)

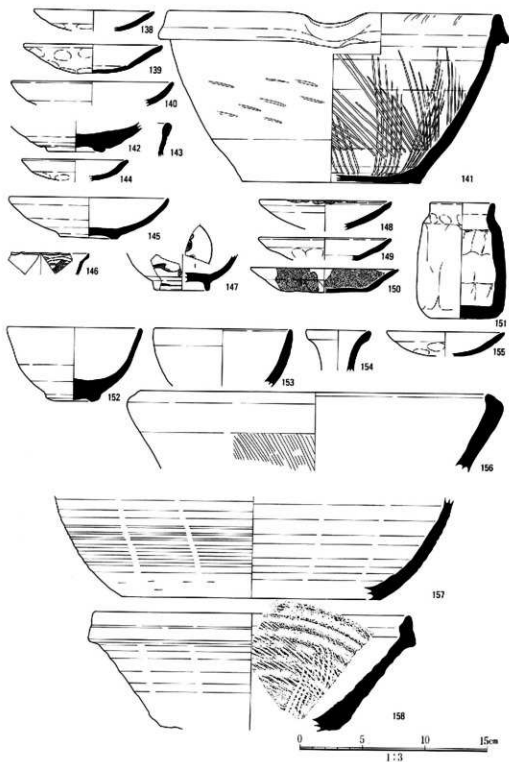


Fig.20 SF301内土壌群出土陶磁器実測図(4) 157のみS=1:4
SK346(138~141)、SK344(142~144)、SK350(145~151)、SK351(152~156)、SX301(157・158)

口縁部を合わせて焼かれた痕跡が残っており、底部には重ね焼きに使用された可能性のある小粘土塊が付着していた。これと類似する播鉢は、豊臣後期から徳川初期にかけて少量見つかっている。成形や窯詰めの手法は九州系の播鉢と共通するが、唐津焼にも上野・高取焼にも適合するものが見い出せず、生産地は不明である。

142～144はSK344出土である。142の唐津焼皿は藁灰釉で、高台には粘土塊が付着している。143は鉄釉の碗で、沓茶碗のような形態と思われる。144は土師器皿B類である。

SK350・351、SX301出土陶磁器(Fig.20、図版14・16)

145～151はSK350出土である。145は唐津焼皿A2類で灰釉、146・147は青花の皿と碗である。146は口縁部をつまみ上げる芙蓉手のもので(皿V類)、147は疊付の軸を搔取らず、植物繊維の痕跡を残している(碗V類)。148・149は土師器皿B類、150はC類で、148は端部をつまみ上げる。

152～156はSK351出土である。152・153は唐津焼碗A類で灰釉、154は備前焼徳利の口縁部である。155は土師器皿B類、156の土師器鉢は外面にハケメがあり、内側に煤が付着している。

157・158はSX301から出土した備前焼水屋甕と播鉢である。水屋甕の外面には重ね焼き

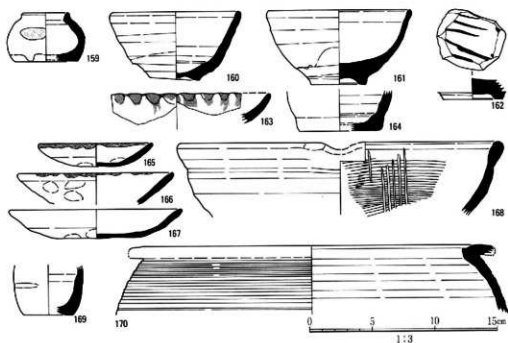


Fig.21 3a層出土陶磁器実測図

の痕が残る。

3a層出土陶磁器(Fig.21、図版16)

159は内面にも施釉した美濃焼の鉄釉小壺で、肩に粘土塊が付着する。水滴かもしれない。160～164は唐津焼である。160・161は碗A類で灰釉、162は絵唐津向付?の底部、163は皿C類の皮鯨手波縁皿で藁灰釉である。164は瓶の底部で、灰色不透明の釉である。165は土師器皿B類、166・167はC類である。168は土師器擂鉢で内面には横方向のハケメがある。同じ擂鉢は大坂では、大阪府教育委員会が調査した中央区本町橋町のマイドームおおさか建設地の意臣期地層出土の報告がある〔佐久間貴士1987〕。169は備前焼小壺である。170は鐙状の口縁を有した口の広い壺で、外面に平行した凹線が刻まれ、内面はヨコナデである。焼きは橙色の土師質で、胎土には白色粒子が目立つ。茶の湯で「占切建水(水指)」と呼ばれて使用されたベトナム製の土器で〔西田宏子他1993〕、同じものは堺でも出土し、壺が京都で出土している〔續伸一郎1990・永田信一他1994〕。近年の調査成果によるとベトナム中部地域で生産されたものらしい〔森本朝子1993〕。

3d層出土陶磁器(Fig.22、図版17)

171～173・177は唐津焼で、171は碗A類、172は碗B類で、171は灰釉、他は鉄釉である。173は灰釉の皿A 1類である。174は青花皿の小片、175は土師器皿B類で、煤が付い

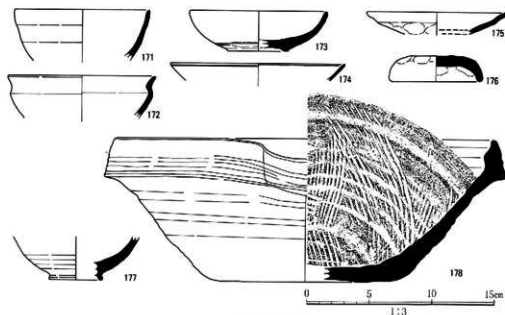


Fig.22 3d層出土陶磁器実測図

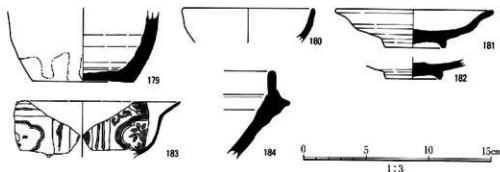


Fig.23 3c層出土陶磁器実測図

ていない。

3c層出土陶磁器(Fig.23、図版17)

179は鉄釉が掛かった美濃焼瓶である。180～182は唐津焼で、180は皿A1類で灰釉、181は薄い透明に近い灰釉が掛かった皿B類で、内底面に3個の砂目がある。182は灰釉で、内底面に小さな3個の胎土目がある。183は口縁が外反する芙蓉手の鉢で、184は備前焼揃鉢である。

SK205～224(第2層下面検出遺構)出土陶磁器(Fig.24・25、図版17～19)

185・186はSK205出土で、185は鉄絵が描かれた唐津焼大皿、186は土師器皿B類である。

187～190はSK207出土である。187は本調査で唯一出土した織部焼で、向付になる。188は粗製の罍皿形の青花小片、189は備前焼小徳利である。190は土師器皿B類で端部をつまみ上げる。また図示していないが、李朝白磁の小片が出土している。

191～193はSK209出土である。191は灰釉の唐津焼皿A2類で、内底面に胎土目がある。192は白磁碗、193は土師器皿B類である。

194～197はSK210出土で、194が志野焼、他は唐津焼である。194には内底面に3個の円錐ピン痕、外底面に3個のトチン痕がある。195は一般の皿B類と異なり、口縁端がほとんど外反しない。高台も華奢で、少ないタイプである。藁灰釉が掛かる。196は口縁の4ヶ所をくはめた皿C類の向付で鉄釉が掛かる。197は皿C類の波縁皿で透明釉である。

198～205はSK211出土で、198～201が唐津焼である。198・199は小型の碗で、透明に近い灰釉が掛かる。200は灰釉の皿A2類、201は藁灰釉の皿底部である。202は外面に草花が描かれた青花碗である(碗V類)。203・204は土師器皿B類、205は備前焼揃鉢である。

206～211はSK212出土である。206の志野焼皿では内底面に3個の円錐ピン痕、外底面に3個のトチン痕が残る。207は唐津焼の皿A1類で藁灰釉である。208は口縁を輪花状に

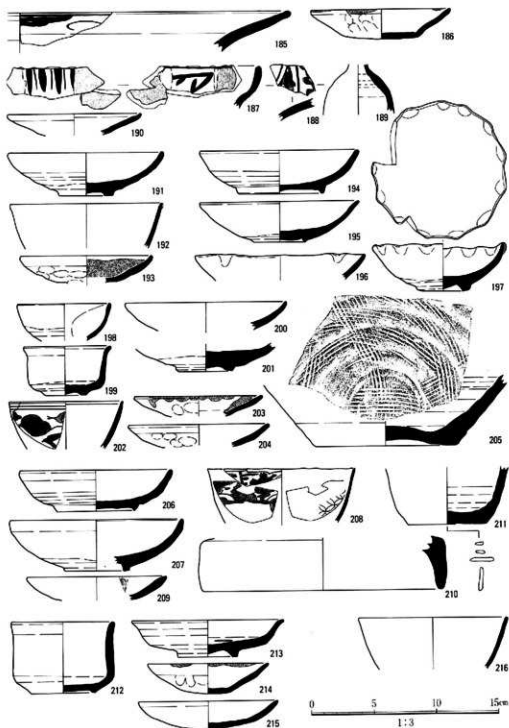


Fig.24 2層下面検出遺構出土陶磁器実測図(1)

SK205(185・186)、SK207(187～190)、SK209(191～193)、SK210(194～197)、SK211(198～205)、SK212(206～211)、SK224(212～215)、SK221(216)

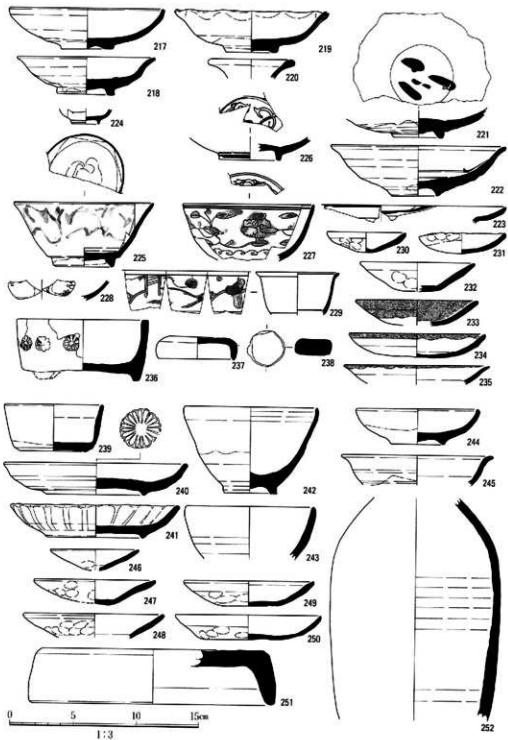


Fig.25 2層下面検出遺構出土陶磁器実測図(2)
SK218(217~238)、SK219・220(239~252)

したもので、外面に飛馬を描き、内面には花を型打ちしている。209は土師器皿B類で、端部をつまみ上げる。210は土師器壺の蓋で、内面は口縁端まで煤が付着している。211は備前焼徳利で、底部外面に焼成前に刻まれた文字がある。

212～215はSK224出土である。212は美濃焼の碗で、高台に3個のトチン痕が残る。213は唐津焼皿B類で透明釉、内外面に胎土目があり、高台底と高台内に初段の痕跡が残っているのが特徴である(図版18の221参照)。これは窯を特定する手がかりになる可能性がある(註6)。214・215は土師器皿B類である。

216はSK221から出土した白磁碗である。

217～238はSK218出土で、217～223は唐津焼である。217は皿A2類で灰釉、218・222は皿B類で灰釉である。218の内底面には胎土目があり、222には鉄絵が描かれている。219は皿C類の波線皿で透明釉である。221の絵唐津皿では高台底と高台内に初段の痕跡が残っており(図版18)、213と共通する。223は口縁部が折れた絵唐津の中皿、220は鉄釉の瓶である。224・229は青花小杯(小杯I類)、226(碗V類)・227(碗IV類)は青花碗で、226は疊付の釉を掻取らず、植物繊維が付着する。228(同皿V類)は名山手の皿である。225の青花碗(原色図版1)はこの時期のものとしては類例のない粗製品である。文様は手描きであるが、18世紀以降に出土するいわゆる印青花と共通する点が多い。器形は、底部からほぼまっすぐに外に開き、口縁は端反になる。陶胎で外面に唐草と圏線、内面に圏線がある。内底面は中心部のみ釉が掛かり、他は露胎である。また同様に高台疊付部分も釉を掛けない。破面には漆継ぎされた痕が残る。236は体部に花のスタンプがある瓦質香炉である。237は焼塩壺蓋、238は瓦を加工した円板である。230・231は土師器皿A類で、230はへそ皿、231は他と全く異なった作り方である。232～235は土師器皿B類である。

239～252はSK219・220出土である。239は美濃焼の向付であり、鉄釉で底部外面には鉄銹が掛けられている。240は美濃焼の灰釉丸皿で、見込には菊のスタンプがある。内底面は釉が環状に掻取られ、高台内にワトチ痕がある。241は志野焼菊皿で、内面に円錐ピンの痕はなく、高台内にトチン痕が残る。242～245は唐津焼で、242・243は灰釉の碗A類、242の高台周辺には砂と粘土塊が付着している。また、口縁端部が立ち上がりつつ伸びる点に特徴がある。244は皿A1類、245は皿B類で共に灰釉である。246は土師器皿A類、他4点はB類である。251は土師器壺の蓋で、内面は口縁端まで煤が付着し、作り方も同種の蓋とかわからない。252は備前焼徳利である。

SD201・202・SK202・SX302出土陶磁器(Fig.26、図版20)

253～256はSD201出土である。253は外面に鉄軸が掛かる瓶で、内面には当て具痕が残る。254は青花碗(碗Ⅵ類)、255は青花皿の底部、256は土師器皿C類である。

257～270はSD202出土で、257・258は志野焼の小碗と向付である。259～262は唐津焼で、259・260は皿B類である。259は普通の皿B類と異って口縁端がほとんど外反せず、195と同タイプで、薬灰釉である点も共通する。260は灰釉で小さな3個の胎土目がある。261は皿C類の波縁皿で透明釉が掛かり、262は皿D類で透明に近い灰釉である。263～266

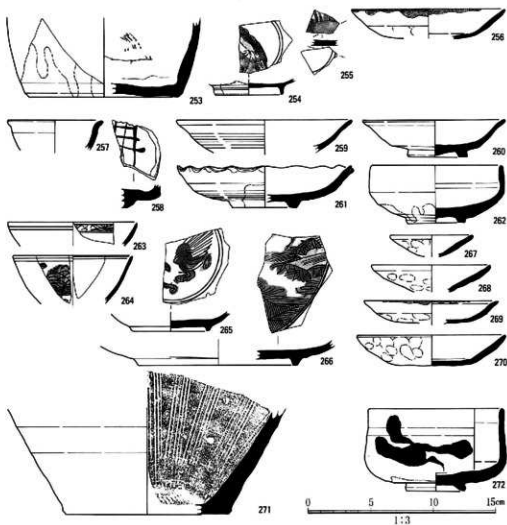


Fig.26 SD201・202, SK202, SX302出土陶磁器実測図
SD201(253～256)、SD202(257～270)、SX302(271)、SK202(272)

の青花では、蛟龍文を描く265(皿Ⅲa類)は高台畳付の軸を掻取り、呉須手の大皿266は軸を掻取らないが、両者とも底に砂が多数付着する(263は皿Ⅲa類、264は碗Ⅳ類)。267は土師器皿A類、268・269はB類で、269は端部が尖りぎみで内傾する。

271はSX302出土の信楽焼播鉢、272はSK202出土の絵唐津茶碗である。

2層・2～1c層出土陶磁器(Fig.27、図版19)

273～277は5 D区などの2層に対応すると推定される炭層からの出土である。273・274は唐津焼で、273は鉄軸の茶碗、274は灰軸の皿A 2類である。275は青磁皿で、内面には口縁部に波状、体部に直線の平行線刻文がある。下層の遺物が上がったものであろう。276は官人を見込に描く青花小碗で、畳付は軸を掻取るが、多数の砂が付着する(小碗Ⅰa類)。277は1本描目の丹波焼播鉢で、体部外面にはハケメが残る。

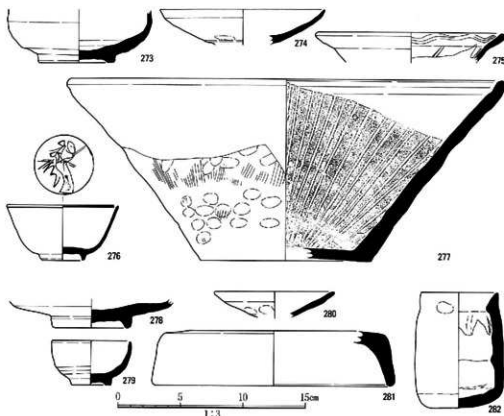


Fig.27 2層、2～1c層出土陶磁器実測図
2層(273～277)、2～1c層(278～282)

278～282は2～1c層出土で、どちらの層が特定できないものである。278・279は唐津焼で、278は透明釉で高台が大きく、高台内にも釉が掛かる。片口の可能性がある。279は灰釉の小碗である。280は土師器皿B類、281は土師器壺の蓋、282は焼塩壺で、281では内面口縁端に煤が付着する。

ii) 瓦類 (Fig.28、図版22)

以下、瓦類・石製品・金属製品・土錘には徳川初期の地層である1c層出土のものが少量混じるが、本節でまとめて報告することにする。

瓦類は、その大部分を占める丸平瓦を除いた軒瓦と道具瓦などだけを報告したい。軒丸瓦は、291がSD501上層、292がSK218、293が1c層出土で、遺構や土層の時期からは291・292が豊臣後期、293が徳川初期に当たる。291・292は小型の部類の瓦で、292の直径は13.8cmである。291・292とも巴は左巻きで珠文は小さく、復元珠文数はそれぞれ16・11個となる。291は周縁部と外区内縁の珠文帯が狭いのが特徴で、292は范が磨滅して木目が見える。これらに比べて293は調整と焼成が良好で、珠文が大きい。復元珠文数は14個前後である。

軒平瓦は、294が6a層上面、295が3b層、296がSK309、297がSK342、298がSK314、299がSK211、300がSK224、301・302が1c層の出土である。遺構や土層の時期からは294が豊臣前期以前、295～300が豊臣後期、301・302が徳川初期に当たる。294は唐草文の一部が残る瓦当左端部で、平瓦との接合部には横方向のキザミがある。295は瓦当中央部のみ残存する唐草文軒平瓦で、中心飾りは一点珠三葉である。上外縁は浅く面取りされている。296も三葉を中心飾りとする唐草文軒平瓦で、上外縁には面取りがない。297は複線で表現された唐草文をもつ大型の軒平瓦で、唐草の巻きは弱い。上外縁は浅く面取りされ、内区に産砂が見える。平瓦との接合部には横方向のキザミがある。298は右側区の破片で、側区は5.5cm以上と広く、上外縁には面取りがない。299は左側3分の1強の破片で、細い唐草文2単位が残り、側区が広い。上端に軽い面取りがある。300は右側半分弱の破片で、左端に残るのは三葉の中心飾りで花卉は外反する。唐草は左右に一単位のみで、内区両側を広くして文様を中心部に集中させるタイプである。内区には産砂が残る。上外縁はやや広く面取りし、外縁をナデている。301では唐草文は巻かず先端が膨らみ、300のように内区の下幅が狭い。上外縁は広く面取りされている。

302は桔梗文を中心飾りにもち、葉脈部がくぼんだ唐草文1単位が残る金箔押瓦で、瓦当面には胎色を呈した漆が残る(註7)。桔梗文の横には唐草の上に珠文、下に萼のような

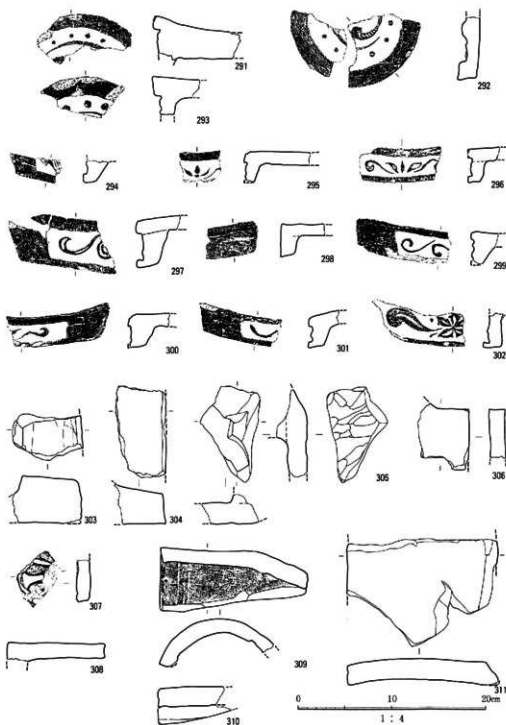


Fig.28 瓦類実測図

小さな子葉がある。中心飾りに桔梗文をもつ軒平瓦は、大坂では大坂城西南に当たる中央体育館地域の豊臣前期遺構からの出土例[大文協1992]や、大坂城南東の中央区玉造2丁目のNW85-17次調査の出土例[大文協1985]がある。また、大坂城の南に当たる難波宮大極殿地域の調査では桔梗文軒丸・軒平瓦が集中して見つかったことがあり、中央区石町2丁目では大坂夏の陣で焼失した屋敷から桔梗文鬼瓦が出土している[田中清美1989]。大坂以外では、大和郡山城出土の軒平瓦[大和郡山市教育委員会1993]や摂津高槻城出土の棟込瓦[高槻市教育委員会1984]、京都市東山の智積院の軒平瓦、伝熊本城出土の軒丸・軒平瓦[熊本県編1924]などが知られている。

303以下は道具瓦などである。303はSK333、304はSK211、305は南東端落込みの1c層、306はSK302、307は3b層、308はSK212、309は5層、310はSK342、311は3a層の出土である。遺構や上層の時期では309が豊臣前期、305が徳川初期で、他は豊臣後期となっている。303は朱漆と思われる赤色の漆を使った金箔押瓦で、鬼瓦の外縁部であろう。金箔は外縁部の表面と内側面の半分まで貼られており、外側面にも一部に漆が残る。304は鬼瓦の外縁部かもしれないが、種類や部位がよくわからない。残存している3面はナデられ、実測図断面の上辺の部分はやや立上がつて続くようである。305は甍瓦の破片で、蟬が付く部分であろう。表面には強いユビナデの痕が残っている。306は扁平な瓦で、残存している2辺のうちの1辺が彎曲しながら続いている。用途などは不明だが、特殊な塼の可能性がある。307は二重菊文の棟込瓦で、赤色の漆を使った金箔押瓦である。10弁に復元される。308は堀り大面とも呼ばれる大棟の台となる瓦で、長さ11.3cmである。扁平な瓦に粘土板を付けて瓦当としているが、下半ははずれている。瓦当には赤色の漆が塗られる。309・310は輪造りと考えられる瓦で、309で長さ15.7cmである。309は無玉縁の丸瓦を截断したもので、凹部に残る痕跡はコビキB(註8)の手法である。311は幅約16cmの鬘斗瓦で、平瓦を焼成前に半截したものである。

iii) 石製品(Fig.29、図版23)

砥石では313がSK307、314・335(図版のみに掲載)がSK211、315が1c層、316が2～1c層の出土である。形態には扁平な板状で規格品のように整ったもの(314・335)、柱状のもの(316)、不定形のもの(313・315)がある。とくに335は小さく、厚さも3mmしかない。335の片面には格子状の傷がある。314の側面には平行する細かな擦痕が残っており、整形痕と推定される。石材の鑑定は行っていないが、いずれも頁岩ではないかと思われる。

317は3b～3a層から出土した石臼の下臼で、孔の一部が残っている。復元径は約

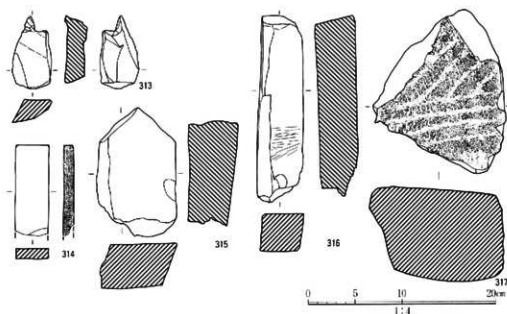


Fig.29 石製品実測図

30cm、厚さは9.7cm、回転方向は左まわしの溝となっている。花崗岩製である。

iv) 金属製品 (Fig.30、原色図版1、図版23)

319は銅製の印章で、SK201から出土した。高さは1.8cmあり、印面は直径2.4～2.6cmでやや歪んでいる。鈕は扁平で約3mmの孔があり、長方形板状の台座がある。銅製品で、印外郭上部には鈕の原型との合わせ目が残っている。印文は文字のようでなく、何かの図像(例えば座った女性)を表しているように見えるが判然としない。印面には一部、朱が残存している。その呼称な

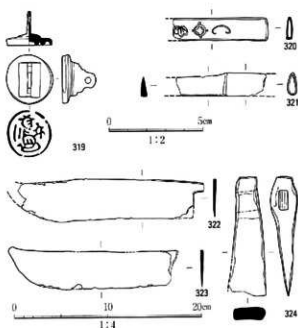


Fig.30 金属製品実測図

Tab.1 銭貨一覧表

銭種	国名	初 鋳 年	西暦	5～4層	3～2層	1c層	その他	合計
開元通宝	唐	高祖武德4年	621		1		1	2
淳化元宝	北宋	太宗淳化元年	990		1			1
咸平元宝	北宋	真宗咸平元年	998				1	1
祥符元宝	北宋	真宗大中祥符元年	1008				1	1
祥符通宝	北宋	真宗大中祥符元年	1008				1	1
天聖元宝	北宋	仁宗天聖元年	1023				1	1
皇宋通宝	北宋	仁宗宝元2年	1039		3	1		4
嘉祐通宝	北宋	仁宗嘉祐元年	1056			1		1
治平元宝	北宋	英宗治平元年	1064			1		1
熙寧元宝	北宋	神宗熙寧元年	1068	1	4	2	1	8
元豐通宝	北宋	神宗元豐元年	1078		1		1	2
元祐通宝	北宋	哲宗元祐元年	1086		2	1		3
紹聖元宝	北宋	哲宗紹聖元年	1094			3		3
聖宋元宝	北宋	徽宗建中靖国元年	1101			1		1
大觀通宝	北宋	徽宗大觀元年	1107			1	1	2
洪武通宝	明	太祖洪武元年	1368		3		1	4
朝鮮通宝	朝鮮	世宗5年	1423		1			1
寛永通宝	日本	寛永13年	1636				1	1
□屬通□					1			1
不明				1	12	4	4	21
合計				2	29	15	14	60

どの妥当性は別として、明から生糸を輸入した際に添付したという説もある、いわゆる糸印に類するものであろう。

320・321はやや小さいが、小柄の可能性のあるもので、柄は銅製である。320には3種の文様が打ち出しによって表わされている。320はSK219・220、321は1c層から出土した。322・323は同種と考えられる鉄製刃物で、背側が先端で反っているのが特徴である。刃は非常に薄く、包丁のように使用できるか疑問がある。322はSD501、323は1c層からの出土である。324は鉄製斧で、柄の木質が残存したまま錆化している。柄は刃に対してやや鋭角に付く。SK205の出土である。

出土した銭貨はTab.1にまとめたとおりである。1c層には寛永通宝(1636年初鋳)がなく、この点は陶磁器の様相と合っている。

v) 木製品 (Fig.31、図版23)

漆椀は325が6a層、326がSK343出土である。両方とも内が朱漆、外が黒漆で、外面には朱漆で文様が描かれる。326の文様は羽を円形に図案化した鶴と推定されるが、325はよ

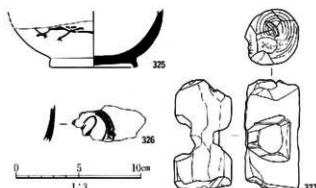


Fig.31 木製品実測図

くわからない。327は丸木を切断し、粗く加工して孔を開けたもので、表面には樹皮の一部が残っている。蓆などを編むための錘の可能性がある。直径4.4cm、長さ8.7cmで、SD501下層から出土した。

vi) 土錘 (Fig.32、Tab.2、図版24)

29 点出土した土錘は二つの形式に分かれる。A類(328~333)は細長い管状、B類(334)はより大型で球形に近い管状である。うちわけはA類 25 点、B類 4 点で、圧倒的にA類が多い。A類は長さ3.6~4.5cm(平均3.85cm)、直径0.8~1.3cm(同1.05cm)、孔径0.2~0.4cm、重さ1.7~5.1g(同3.30g)である。このような値は、豊臣期以前の遺物と共伴した6a層や6a

Tab.2 土錘一覧表

番号	出土層位	遺構名	長さ	直径	孔径	重さ	残存状況	分類	遺物番号
1	6 a 層		(2.3)	0.8	0.2	(0.9)	1/2欠	A類	
2	6 a 層		3.6	1	0.4	2.8	ほぼ完形	A類	
3	6 a 層		4.2	1.2	0.3	4.7	ほぼ完形	A類	
4	6 層上面	SK601	4.1	1	0.2	3.0	ほぼ完形	A類	
5	6 層上面	SK601	(2.3)	1	0.2	(1.2)	1/2欠	A類	
6	6 層上面	SK601	3.6	0.9	0.2	2.4	ほぼ完形	A類	
7	6 層上面	SK601	(1.9)		0.2	(0.7)	1/2以上欠	A類	
8	6 層上面	SK601	3.9	0.9	0.2	2.1	ほぼ完形	A類	328
9	6 層上面	SK607	3.7	0.9	0.2	1.7	ほぼ完形	A類	
10	6 層上面	SK607	3.6	1.1	0.3	3.3	ほぼ完形	A類	
11	6 層上面	SK607	4.0	1	0.3	3.1	ほぼ完形	A類	329
12	6 層上面	SK608	(3.0)	1.1	0.2	(3.0)	1/3欠	A類	
13	6 層上面	SK609	4.3	1.3	0.4	5.1	ほぼ完形	A類	330
14	5 層		3.0	1	0.2	2.1	ほぼ完形	A類	
15	5 層上面	SD501下層	4.4	1.3	0.3	5.1	完形	A類	
16	5 層上面	SD501下層	4.2	1.1	0.2	4.0	ほぼ完形	A類	
17	3 c 層		3.8	0.8	0.2	1.9	ほぼ完形	A類	
18	2 層下面	SK201	3.5	1.3	0.4	4.3	完形	A類	
19	2 層下面	SK201	(2.8)		0.3	(3.4)	1/3欠	A類	
20	1 c 層		4.0	1.2	0.4	3.9	ほぼ完形	A類	
21	1 c 層		3.6	0.9	0.2	2.3	完形	A類	331
22	1 c 層		4.5	1.1		4.0	ほぼ完形	A類	
23	1 c 層		4.1	1.2		4.7	ほぼ完形	A類	333
24	1 c 層		3.1	1	0.2	2.3	ほぼ完形	A類	
25	1 c 層		3.8	1.1	0.2	3.1	ほぼ完形	A類	332
26	3 b 層上面	SK303	(3.3)		1.7	(23.3)	1/2欠	B類	
27	3 b 層上面	SK342	(3.2)			(14.1)	1/2欠	B類	336
28	2 層下面	SK212	3.6	3.9	1.8	38.9	ほぼ完形	B類	334
29	1 c 層		3.3	3.6	1.7	29.5	完形	B類	337

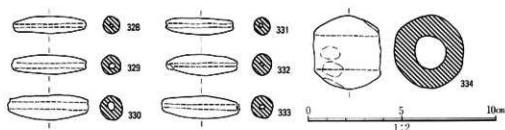


Fig.32 土鉢実測図

層上面の遺構から出土したものと、豊臣期から徳川初期のもので明らかな差を見い出せない。一方のB類は、長さはA類とかわらないが、直径と孔径が大きく、重さは約10倍ある。B類は6層段階では出土していないが、資料数が少ないため時期差を表すものかはわからない。

註)

- (1)「下面検出」という用語の概念は[趙哲済1983]による。
- (2)大坂では佐賀藩蔵屋敷図(元禄5年(1692)作)に描かれているものがあり、佐藤巧著「近世武士住宅」で挙げられている大名居館や諸士の屋敷図面に多数の例が見える。
- (3)A1類とA2類の区分は、実測図によって口縁水平面より2cm下がったところでの口縁部外面より断面外側ラインまでの長さを基準にした。その値が15mm未満をA1類、それ以上をA2類としている。この方法は唐津市小十郎跡の発掘調査報告書[唐津市教育委員会1988]での手法を参考にしたもので、A1類の形態は小十郎のB類とA3類、A2類の形態は小十郎のA1類とA2類には該当する。
- (4)口径による分類に際して森は、B類とした皿でも9cmに近いものと、11cmに近いものでは明らかに差があるとしたが、本調査例のB類では9.1~9.5cmと10.6~11.0cmに二つのピークがあった。
- (5)大橋康二氏と森毅の鑑定による。
- (6)大橋康二氏の御教示によれば、高台に初設痕があるものは西有田町小森谷窯で見られるという。
- (7)大阪市中央体育館地域出土の金箔押瓦を対象にした鑑定では、鉛色に変色した漆や黒色の漆は、意識的に色を着けた黒漆ではなく、生漆であるという結果が出されている(『難波宮址の研究』第九[大阪市文化財協会1992]、188~189頁)。
- (8)森田克行「第5章 考察 第2節 IV屋瓦」[高槻市教育委員会1984]

第5節 徳川期(Ⅲ期)の遺構と遺物

1) 遺構(Fig.33、図版10)

1c層が形成された17世紀前半以降から現代にいたるすべての遺構は、調査を開始した1c層の上面や中途(Dライン以西)と1b層上面(同以東)で一度に調査したものである。したがって各時期の遺構が混在しており、浅い遺構やⅢ期でも新しい時期の遺構はほとんど調査ができていない。ここでは甚だ不十分ながら、残存していた遺構のなかでとくに注意すべきもののみを取り上げることにする。

Ⅱ期に存在した調査区東端部の落込みはⅢ期になって埋められるが、その埋土下層はほぼ1c層に対応して17世紀前半、上層である1b層は17世紀後半である。1b層の形成によって調査区全体は平らになる。その後、東端部にはいくつかの土壌が掘られるが、SK103～106では石が据えられているのが確認された。これらでは、SK103とSK104、SK105とSK106がそれぞれ畦状の掘り残しを挟んで南北に並んでいる。まずSK103・104は、SK103が南北1.60m、東西1.70m、深さ1.20mであり、SK104が南北1.75m、東西1.85mの隅丸方形で深さ1.20mである。SK103では0.35m埋めた後に、長さ0.60m、幅0.30mの大きさの石が置かれていた。また、SK104では大小の石を組んだ上に一辺0.55m、厚さ0.30mの石を据えている(Fig.34)。石上面の高さは、SK103でTP+1.30m(土壌上端から0.55m)、SK104でTP+1.45mである。石中央部での両者の間隔は2.05mある。一方、SK105・106は、SK105が南北1.55m、東西1.65mの隅丸方形で、深さ0.90mであり、SK106が南北1.75m、東西1.6m(推定)の隅丸方形で、深さ0.9m(推定)である。SK106では小型の石をかませて長さ0.40m、幅0.25mの石が据わっていた。また、SK106ではSK104と同様に大小の石を組んだ上に、一辺0.40m、厚さ0.25mの石を据えており(Fig.35)、この石には幅8cm、深さ4cmの矢穴が一ヶ所にある。石上面の高さはSK105でTP+1.10m、SK106でTP+1.40mであった。また石中央部での両者の間隔は1.60mである。ただし、これらの土壌の埋土には他にも大型の石があり、SK106では上記の石より上に据わっていたものを誤って掘上げた可能性もある。またSK103とSK105、SK104とSK106の間隔は、石中央部でそれぞれ3.40m、3.30mとなっている。SK104・106からは17世紀後半の陶磁器が出上した(Fig.39)。

これら四つの土壌では柱痕跡などは確認できなかったが、かなりの重量の構造物を支えた基礎の可能性が考えられる。具体的な構造などは不明だが、この地に置かれていた幕府

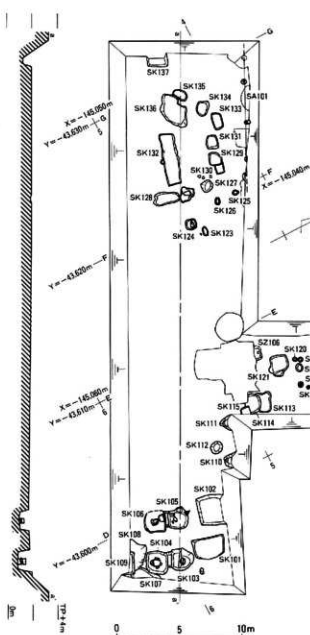


Fig.33 1c・1b層検出遺構(Ⅲ期)実測図

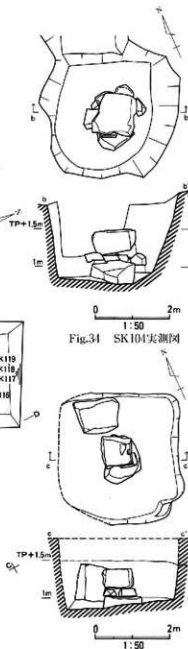


Fig.34 SK104実測図

Fig.35 SK106実測図

の材木蔵との関連が想定される。

周辺の上層では、SK101・107で一辺0.50mに及ぶ切り石を埋土に含んでいたが、据えられた石は確認していない。またSK102の埋土には丹波焼大甕1個体分があった。

調査区北西辺では掘立柱の塼と推定されるSA101がある。SA101は9.20mで5個の柱穴が確認されたが、両端は調査区外へ続くと推測される。柱間1.15mのところがあるが、無くなっている柱穴があり、柱間寸法は不明である。掘形は円形で、直径0.40～0.55m、深さ0.55～0.75m、柱は直径10cm前後で、根石が据えられていた。方向は北で西へ64°振っている。SA101の時期は明らかでないが、遺構検出面は上記の土層群とかわらない。SA101とは連続しないが、4 D区のSZ106では根石が置かれ、直径25cmの柱痕跡が認められた。

2) 遺物

1c層出土陶磁器(Fig.36・37、図版20・21)

341～344では341が美濃焼小碗、342が志野焼向付である。343と344は志野焼灯明具で、皿と蓋は出土地点は異なるが、一組のものであろう。皿には粘土板を貼付けた灯芯受けが付くが、把手は欠けている。糸切り底で、口縁端部は内側に折り返し、その外面だけが露胎になっている。蓋はつまみとかえりがあり、二つの開口部が作られる。大きい方の開口部には煤が染み込んだようになっている。同様の志野焼灯明具は、大坂では豊臣後期の遺構や大坂夏の陣の焼土層から出土した例がある[土岐市美濃陶磁歴史館1993・1994]。

345～354は唐津焼である。345・346は灰釉の小碗で、346の口縁には煤が付着し、灯明具に転用された可能性がある。347・349は灰釉の碗A類、350は絵唐津の碗B類、348は鉄釉の碗である。351は灰釉の皿A2類で、内底面と高台に4個の胎土目がある。352は透明釉の皿B類で、白っぽい胎土が特徴的である。353は絵唐津の皿C類向付、354は灰釉の香炉である。355～358は上野・高取焼である。355は口縁が外に折れる皿、356・357は大皿で、356は高台が小さい。357は濃緑色の灰釉、他は薬灰釉である。358は台付の皿と推定されるもので、皿部は薬灰釉と鉄釉を掛け分けている。台部には掛け分けは及んでいないことから、皿・台を別に施釉した後、両者を釉で付けたものと考えられる。

359～366は中国製磁器である。359(碗Ⅱb類)・361(碗Ⅱb類)は粗製の青花碗で、359は疊付の釉を掻取り、361は高台脇から高台内が露胎である。360は外面に草花を描く碗である(碗Ⅳb類)。362・363の青花皿では疊付の釉を掻取り、高台には砂粒が付着する(皿Ⅲa類)。白磁皿364・青磁皿365では、365に意識的な細かい貫入が見られる。366は外面

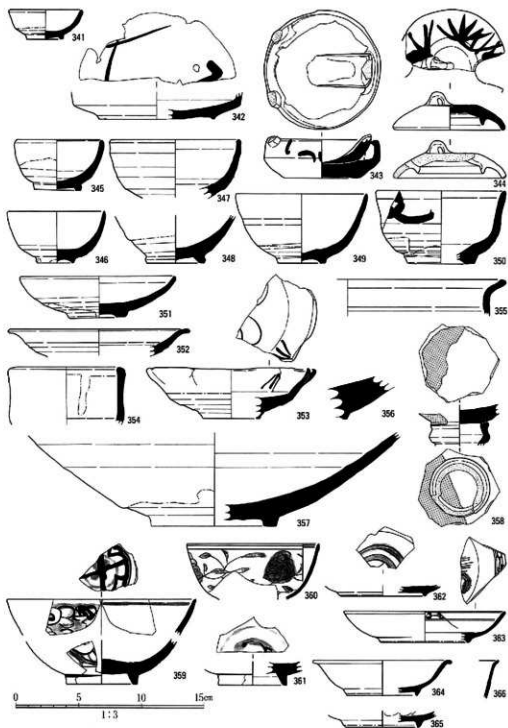


Fig.36 1c層出土陶磁器実測図(1)

褐釉の端反り碗である。

367～376の上師器皿では375が端部をつまみ上げ、376は上方へ折り曲げる。他は端部を丸くおさめ、強いナデによって内面の体部と底部の境に段が生じるもの(368～370)と、体部から底部になめらかに続いているもの(371～374)がある。この2種の違いは豊臣期でも見られる。377は土鈴、378は大和型土釜、379は壺の蓋、383は口縁部が内側に拡張された鉢である。380～382の焼塩壺では、普通に見られる焼塩壺381に対し、円板状の底部の

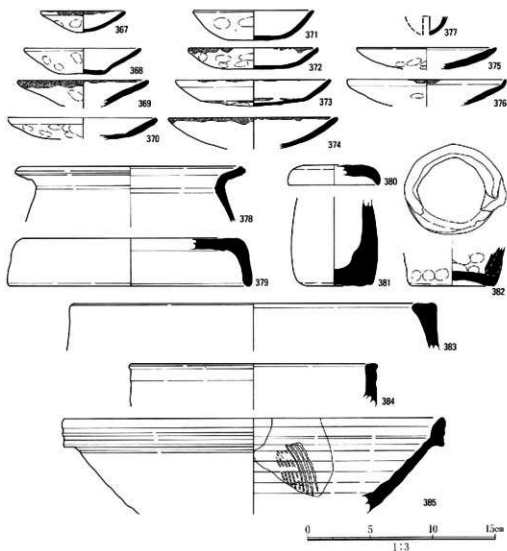


Fig.37 1c層出土陶磁器実測図(2)

上に粘土板を巻いて体部をつくるものがある(382)。384・385は備前焼の鉢と搦鉢である。

南東端落込み出土陶磁器(Fig.38)

386～390が1c層に相当すると考えられる埋土下層出土、391・392が1b層である上層出土である。

386は唐津焼碗A類で灰釉、387は芙蓉手タイプの青花皿(皿V類)、388は李朝白磁の浅い碗である。389は体部に花のスタンプのある瓦質香炉、390は瓦質の鉢である。391は唐津焼の香炉で、銅緑釉が外面体部と内面上半に掛かる。392は7条1単位の櫛引きの搦目をもつ丹波焼搦鉢である。1c層以下で出土した丹波焼搦鉢の搦目は、すべて1本引きである。

SK104・106出土陶磁器(Fig.39)

調査区南東端の石組を据えた土壌から出土した伊万里焼碗の小片で、393・394はSK104、395～397はSK106から出土した。17世紀後半のものと推定される。

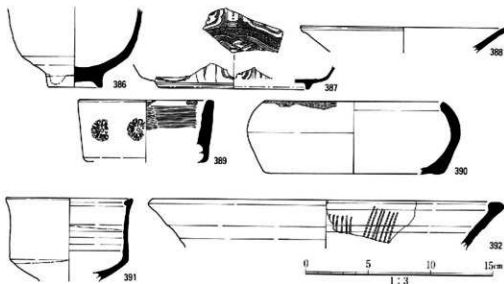


Fig.38 南東端落込み出土陶磁器実測図

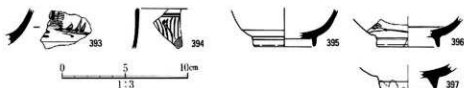


Fig.39 SK104・106出土陶磁器実測図



Fig.40 水指および清朝磁器実測図

水指および清朝磁器 (Fig.40、図版24)

特殊な陶磁器のみを最後に報告する。398・399は同形の水指形陶器で、1a層以降の出土である。外面は白化粧した後に興須で文様を描いており、内面は口縁部を除いて露胎である。文様は、「春」・「万」の文字の入った花縁の円4個と菊花4個を交互に配し、間を唐草でつないでいる。関西の窯の製品であろう。

400は清朝磁器の小碗で、SK134の出土である。瑠璃釉と黒線の縁取りで上絵付けされているが、黒線はほとんど消えており、口縁端は釉剥ぎされている。福建省德化窯の製品と推定され、共伴した伊万里焼は19世紀初めまでのものである。

(南秀雄)

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

第1節 文献史料からみた天満本願寺

はじめに

本調査は「天満本願寺跡」の発掘調査として行われた。本願寺が天満に寺基をおいた期間は、天正13年から19年までのわずか7年間に過ぎない。しかし、この時期は豊臣政権による近世都市大坂の開発が開始された時期にあたり、本願寺の移転もその一環として行われたものであった。近世都市大坂の成立期における天満の位置づけは、内田九州男氏らによって明らかにされてきた[内田九州男1985、1989]。また、伊藤毅氏は、建築史学の立場から天満寺内町の空間的復原、またその意義など天満本願寺に関する多角的な検討を行っている[伊藤毅1987]。本節では、これらの先行研究の成果に依拠しながら、特に調査地点との関係を念頭におきつつ、天満本願寺をめぐる問題点の整理を行ってゆきたい。

1) 天満本願寺の位置

今回の調査は、天満本願寺が調査地付近にあったという認識のもとに行われた(註1)。しかし、天満本願寺の御坊の位置については二通りの説が提唱されている。まず、この問題について検討を行う。

第一の説は、天満本願寺は大川に面した現在の造幣局付近にあったとする説である。天正14年7月19日の本願寺御影堂の上棟式の時に門徒衆と対岸の武士との間で石つぶてを投げ合う騒動が発生したという「宇野主水記」の記事など、いくつかの文献の記事が推定の根拠とされている。さらに伊藤毅氏は、寺内町の空間的復原を行った結果、町場に含まれない川岸近くの地区が御坊の位置として適当であるという結論を導いている。

第二の説は、現在の滝川公園付近とする説である。この位置には徳川期に興正寺があったが、本願寺が京都へ移転した際、その坊舎が興正寺に引き継がれたという伝承が根拠となっている。櫻井成廣氏がこの説に基づく復元図を提示し[櫻井成廣1970]、内田九州男氏もこの説を支持している[内田九州男1989]。

今のところこの問題は決着を見るに至っていないが、ここではまず、従来注目されていない史料を提示する。

○御破損奉行

佐橋儀兵衛殿	御城代御下屋敷東横西側ノ方
久保田又左衛門殿	天満川崎御坊木蔵南ノ方
戸田清三郎殿	同所北ノ方

引用した史料は、元禄8年開板、同16年改訂の『公私要覧』(大阪市史史料第15輯所収)のうち大坂破損奉行について記した個所である。大坂破損奉行は幕府関係の営繕・材木の管理を担当する役職である。氏名の後に記されているのはそれぞれの屋敷の位置であるが、久保田・戸田の両名の項には「天満川崎御坊」の記載が見られる。この「天満川崎御坊」が指す内容としては、①天正13～19年の天満本願寺の御坊、②慶長6～13年の天満御坊、③慶長13年以降の天満御坊(天満別院)の三通りの可能性が考えられる(この経緯について

Tab.3 天満本願寺関係年表

天正 8(1580)	4月	石山本願寺、大坂を退去
11(1583)	9月	豊臣秀吉、大坂城築城に着手
13(1585)	4月	秀吉、本願寺に天満移転を命ず
	8月	阿弥陀堂ほか建立に着手
		顕如ら貝塚から海路天満へ移住
14(1586)	4月	秀吉、天満寺内の堤防普請を開始
	6月	御影堂の建立に着手
	7月	御影堂上棟式、この時対岸との間で乱闘起こる
19(1591)	1月	秀吉、本願寺に京都移転を命ず
	7月	御影堂の移築開始
慶長 6(1601)	11月	天満御坊建立
12(1607)	12月	天満火災、天満橋より東を焼く
13(1608)		天満御坊、現天満別院の位置に移転
19(1614)	10月	大坂冬の陣、天満・船場を焼く
20(1615)	4月	大坂夏の陣
明暦 1(1655)		この頃までに材木奉行屋敷がおかれる
3(1657)		この頃までに幕府材木蔵がおかれる

2) 天満本願寺の周辺

調査地は大川岸に位置している。かつての大川は現在よりも川幅が広く、調査地のすぐ近くに岸があったと考えられる。天満寺内のなかで、こうした場所はどのように利用されていたであろうか。断片的な記述にならざるをえないが、関係すると思われる事項を文献史料の中から抽出してみることにする。

大坂では、「北浜」の地名などに見られるように、川に面した場所を「浜」と呼ぶことがある。天満寺内にも「浜」と呼ばれる場所があった。この「浜」について伊藤穀氏は、寺内町の南に広がる当初は町割の施されていなかった部分であると推定している。とはいえ開発は早くから行われていたようで、材木屋・髪結・湯屋などがこの地の住人として記事に現れてくる。『言経御記』では「南浜」「西浜」の地名が見られるが、天満東端の川岸を表すと考えられる「浜」の地名を見出すことはできない。寺内の範囲は「東ノ河縁マデ」とされているから、調査地付近の川岸は「浜」とは呼ばれていなかったのかもしれない。

川岸には「南ノ舟付」「東ノ舟付」など数カ所の舟付場があった。石山寺内には「寺内之浦」があり、「唐船」が停泊できる規模の舟付場があったという〔仁木安1994〕。天満寺内の舟付場がどれほどの規模であったかはわからないが、山科言経らが舟付場の見物にしばしば出かけているところを見ると発着する船で相当な賑わいを見せていたものと思われる。

天満寺内は二方を川に面していたから、川の増水によってしばしば洪水に見舞われていた。天正13年には、8月25日から3日間降り続いた雨のため洪水となった。また、翌14年6月初旬には、4月末から断続的に降り続いた雨のため再び水かさが増し「河ノ堤へ一尺モ二尺モ水カ、ル」〔宇野主水記〕のような状態となっている。このため天満寺内での洪水対策は急務であり、天正14年4月15日から秀吉の命によって堤の普請が行われている。この時工事が行われた堤は、『言経御記』では「北ノ堤」、〔宇野主水記〕では「河縁ノ堤」と表現されている。おそらく天満東端の川岸に築かれたものであろう。

この堤の普請の直後には、本願寺御影堂の建築が開始されている。あるいは堤の普請と御影堂の工事は一連のものであったかもしれない。顕如らが天満に入る前の天正13年8月4日、すでに草堂(阿弥陀堂)などの建築が開始されていた。しかし、これらは急ごしらえの粗末な建物であつたらしく「ひとつは外間もいかが」という有様であったため、翌14年8月13日の証如の33回忌までに御堂(御影堂)を建立することになった。御影堂の工事は、6月1日築地、同4日定礎、28日柱立式と進行し、7月19日には上棟式が行われている。こうして完成した御堂は十間四方で屋根は取葺(粉板を並べて石または丸太などを押えに

た屋根)、まわりの塀は高さ6尺ばかりで屋根は小麦藁葺であったという。この御堂は天正19年、京都移転に伴って移築されたと伝えられる。このため『天満別院誌』では、興正寺に移築されたとすれば阿弥陀堂のことではないかと推測している。

3) 本願寺移転後の天満

天満本願寺は天正19年に京都へ移転を命じられる。この移転は、前年に行われた洛中再編に関連するものであった。この理由についてイエズス会宣教師のフロイスは、「まずこの仏僧(顕如)を拝もうとして日本全国から蟬集して来る帰依者の激しい出入りによって、都の町がますます発展し、人口を増し、豊かになるのを欲したこと。次には、信長の時代に幾年も継続したように、(顕如)が天下を攪乱することがないように、将来におけるなんらかの不穏な動きを抑制するために、自らの許に留め置くことを望んだからである」(『日本史』第33章)と述べている(註2)。

京都移転の翌年(文禄元年(1592))、本願寺門主顕如が没し教如がその跡を継いだ。しかし翌2年(1593)、教如は石山退去の際に籠城を主張したことなどを理由に秀吉から隠居を命じられている。隠居後の教如は大谷本願寺の分立を指向して徳川家康に接近するなどの活動を続け、文禄4年(1595)頃には旧地石山の近辺(中央区道修町1丁目付近と推定されている)に大谷本願寺(渡辺御坊)を建立する。大谷本願寺は慶長3年の「町中屋敷替」に伴って船場の西へ移り、慶長7年(1602)に京都烏丸に大谷派本願寺が創建されてからは難波別院となる。

一方、門徒衆の手で慶長6年(1601)には天満御坊が建立されている。『東本願寺日記』慶長6年11月10日条に「大坂天満(御坊)移徙七昼夜。御式上様(教如)」とあるのがそれである。この天満御坊の位置は、『上壇間日記』元文5年(1740)5月の条に、「当天満御坊者往古川崎御堂にて御座候処、教如上人様御在寺被遊候節、川辺に被成候故、只今之敷地へ御引移被遊候」とあることから天正年間の天満本願寺と同じ位置であると考えられている(以上、『天満別院誌』)。本願寺が京都に移った天正19年からこの年までの10年間について、天満本願寺の跡地がどのように利用されていたかは明らかではない。他の建物が建てられていたとしたならば、再びこの地に御坊を開くことは困難であろうと思われるから、川端のこの地は特に利用されていなかった可能性も考えられよう。

天満御坊は慶長13年(1608)に現在の天満別院の位置に移転する。先の史料中「只今之敷地」とあるのは、この場所を指している。その前年には天満で大規模な火災があった。相国

寺鹿苑院主の執務日記である『鹿苑日録』の慶長12年(1607)12月27日条には、「天満橋ヨリ二町ホト西ヨリ東ノ端迄焼却。及亥時不止。折節西風甚シク終ニ不止。各驚愕者也。」と、この火災のようすが記されている。火災の範囲は、東西は記されているが南北はわからない。あるいはこの火災によって川岸にあった天満御坊も被害を受けたかもしれない。

慶長13年以降については確実な資料がなく不明である。何らかの建物があったとすれば大坂冬の陣の際に焼失した可能性が高い。

徳川期の天満には諸藩の蔵屋敷や町奉行所の与力・同心屋敷、材木蔵・材木奉行(のち破損奉行)屋敷などが建てられる。調査地は、材木蔵・材木奉行屋敷の位置にあたる。天満の武家屋敷が記されたもっとも古い絵図は、大阪市立博物館所蔵の明暦元年(1655)「大坂三郷町絵図」である(Fig.42)。この絵図には大川岸の材木奉行屋敷が記載されているが、その北側には何も描かれておらず空地となっていたようである。ところが明暦3年(1657)「新板大坂之図」には、この位置に「御蔵」が記載されている(Fig.43)。絵図の記載に従えば、明暦元年から3年までの間に材木蔵が建てられたということになる。

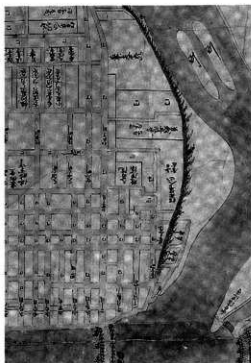


Fig.42 明暦元年「大坂三郷町絵図」部分
(大阪市立博物館蔵)

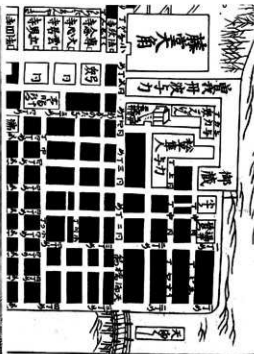


Fig.43 明暦3年「新板大坂之図」部分

ところで「大坂三郷町絵図」には、調査地の近くに堤が描かれている。破損奉行屋敷との位置関係から見て、調査地の位置は堤の外側にあたる。絵図の堤が築かれた年代は明らかでないが、先に触れた天満寺内に築かれた堤との関係が気になる場所である。堤の内か外かという問題は、検出された建物の性格を明らかにする上で重要な意味をもっているからである。

おわりに

近年の調査成果の蓄積によって、城下町整備以前の船場のようすが明らかにされてきている。同様に、天満においても天満本願寺の移転以前から都市化の前提となる開発が行われていたであろう。具体的には、渡辺津周辺の集落、天満宮の門前町、石山寺内町の外町などが想定できる。しかし、これらに関して残された文献史料はほとんど知られていない。幸い天満本願寺については、『言経卿記』など良質の記録が残されており、その具体的な姿を知ることができる。しかし、発掘調査が行われるような個々の地点については、未だ明らかにされていない部分が大きい。これには、史料の限界という要因とともに、史料を読み込む際の問題意識のあり方が大きく係わっているであろう。今回の調査のように近世の遺跡の検討を行う場合、考古資料と文献史料とをどのように有機的に関連づけるかということが一つの焦点となる。その方法論を見出してゆくことが今後の大きな課題である。

(豆谷浩之)

註)

- (1)「天満本願寺」という言葉は、寺内全体を意味する場合に用いられることもあるが、ここでは本願寺の御坊という限定された意味で用いている。
- (2)天正13年の天満移転、同19年の京都移転がいずれも豊臣政権の都市政策を反映したものであることは数多くの研究が指摘するところである。当時の状況からみて豊臣政権側の意向が第一義的であることはまちがいのないところであるが、本願寺側の事情にまったく触れられていないところに問題が残るように思われる。

この点に関連して、信長・秀吉らに仕えた前野氏の文書をもとに寛永年間に編纂された『武功夜話』に、次のような記事がある。天正10年、山崎決戦を目前にした秀吉が、教如に対し使者木下吉隆を通じて「且つ連臣を征伐なし終り天下静産の後、秀吉当時の大憾越と成り、京都において本堂再建すべきの旨」を申し入れたという内容である。天正10年段階と19年の段階では本願寺と豊臣政権の力関係には大きな差があるものの、注意すべき問題ではなかろうか。

第2節 天満本願寺跡出土陶磁器の検討

1) 16世紀末から17世紀前半の陶磁器編年

大坂の陶磁器編年は、OS83-15次調査で層位的に出土した資料を基本として研究されてきた。報告書で青花の分析を行った鈴木秀典は、第8層を石山本願寺の焼亡に関連させ1580年に、第7・6層を1580～1600年の「豊臣期前半」に、第4層を1600～1615年の「豊臣期後半」に比定した(註1)。そして、石山本願寺期の碗は饅頭心がほとんどであること、豊臣期前半には饅頭心碗に加えて粗製の碗・皿が増加すること、豊臣期後半には高台疊付に砂が付着する粗製碗が新たに出現することなど、石山本願寺期から豊臣期にかけての青花の変遷を示した[大阪市文化財協会1988]。その後、鈴木は「豊臣前期」と「豊臣後期」の境を三の丸普請と関連させ慶長3年(1598)とし、それぞれの陶磁器組成の変化を示した[鈴木秀典1990・91]。その見解は、資料の増加により細部において変更すべき部分はあるものの、現在でも基本的に変更を要しないものである。

鈴木の結果を基に中央体育館地域の陶磁器を整理した筆者は、鈴木が明らかにした豊臣前期の陶磁器組成を補完する資料を報告した。あわせて、元和6・7年の紀年銘木簡を伴う資料を公表し、大坂における石山本願寺期から元和期にかけての資料が明らかとなった[大阪市文化財協会1992]。また、鈴木が想定していた豊臣後期前半の陶磁器を船場地域の調査から抽出し、慶長20年(1615)の大坂夏の陣焼土層出土遺物と区別できる遺物群が存在することを示した[森穀1994A・B]。

以上にまとめた石山本願寺期から徳川初期にかけての陶磁器変遷の概略を示したのがFig.44である。この図を基に、今回の出土遺物がどの時期に比定できるかを検討しよう。

2) 層位別陶磁器の時期

今回の調査で出土した陶磁器のうち、豊臣期に比定できるのは5層から2層までの陶磁器である。5層出土の遺物は多くないが、美濃焼天目碗14・15、同丸碗17、粗製の青花皿20、白磁皿18のすべてが豊臣前期の特徴を示している。

SD501埋土下層(4b層)出土の遺物は、美濃焼天目碗25・軟質施釉陶器碗26・27、中国製色絵碗30、粗製の青花碗29、そぎのある青磁皿28、丹波焼大平鉢32、信楽焼壺31がある。中国製品はいずれも豊臣前期の特徴をもつものの、銅緑釉を施した軟質施釉陶器は、

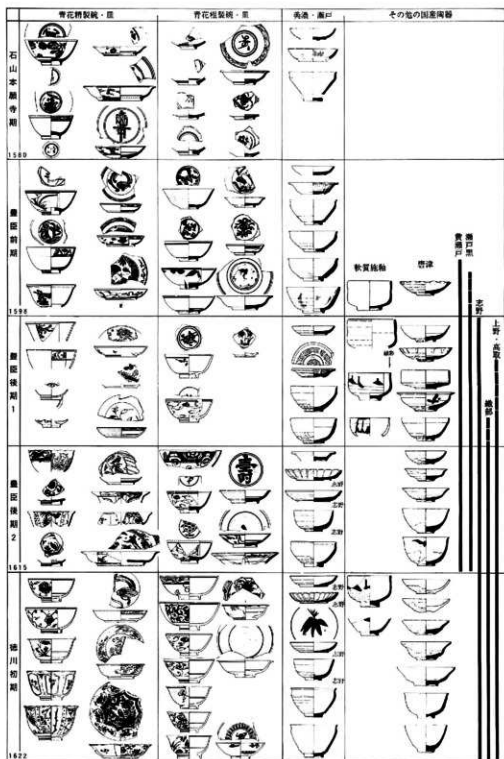


Fig.44 16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器変遷

これまで豊臣前期には認められておらず、後期から出土する製品である。また、美濃焼天目碗も大窯製品では新しい時期のものと考えられることから、SD501下層(4b層)出土の陶磁器は、豊臣前期の可能性を残しながらも、後期の古い様相と考えた方がよいだろう。

SD501上層(4a層)出土の陶磁器は、5層・SD501下層までの遺物組成と大きな差が認められる。出土量は多くないが国産の施釉陶器の中に唐津焼が目だつようになり、豊臣後期の陶磁器組成を示している。

SD501が埋められ、道路となった後に掘られたゴミ穴群は、地層から少なくとも2時期に分けられるものである。しかし、3b層と3a層出土遺物に時期差を認めることは難しい。そこで、SF301上で検出されたゴミ穴群出土の陶磁器を一括してみると、豊臣後期から出現する粗製の碗55が出土すること(註2)、名山手の皿146が含まれていること、国産品では唐津焼が圧倒的多数を占めるなど、豊臣後期の一般的な組成を示している。しかし、豊臣後期末年の遺物群と比較すると、唐津焼に初期の製品とされる藁灰釉の製品が目だつことや、出土量は少ないものの、織部焼を含んでいないことなど豊臣後期2の遺物群とは異なる要素も認められる。SD501下層を後期の古い段階と考えた場合、3層の遺物は後期1と2の中間的な様相を示しているといえよう。3層の遺物が大坂冬の陣からどの程度さかのぼるかは明らかでないが、唐津系と考えられる資料の中に岸岳系の製品を含むことから、消費地における岸岳系唐津のあり方を考える上で重要である。この点については、後で検討を加えたい。

2層は、この地域が焼けた大坂冬の陣の焼土層と考えられる地層である。2層出土の陶磁器には芙蓉手の碗254、それらに伴うことの多い精製の碗208・227に加え、粗製の碗225などがある。また、国産陶磁器では、織部焼が出土し、2層の遺物は豊臣後期末の標準的な陶磁器組成を示しているといえよう。

以上の検討から、各地層の陶磁器の様相は5層が豊臣前期段階、SD501下層および上層が豊臣後期1、3層が後期1と後期2の中間的な様相、2層が豊臣後期2に比定できる。また、徳川初期とされる1層の遺物もほとんどは豊臣期の遺物であるといえよう。

3) 大坂出土の藁灰釉陶器

3層から出土した唐津焼の特徴は、唐津焼の初期に多いとされる岸岳系の製品が目だつ点である。岸岳系唐津の特徴である藁灰釉の製品は、これまでも皮鯨手の皿などが船場の調査で出土していた。ところが、徳川初期の元和6・7年(1620・21)の木簡と共伴する

遺物群や初期伊万里を伴う17世紀前半の遺物群の中にも多数の薬灰釉製品が含まれており、生産地で最古の一群とされる岸岳系唐津と徳川初期に出土が多い薬灰釉製品を十分認識できていなかった。

また、大坂出土の桃山陶器を検討した伊藤純は、天正20(1592)年銘の三耳壺、天正19年に自刃した利休が所持したとされる茶碗の存在などを勘案して、唐津焼が大量に流通する前に、「プロト唐津」ともいえる岸岳系の唐津焼が存在すると考えた[伊藤純1993]。たしかに、豊臣前期に少量ではあるが唐津焼が出土していることや、紀年銘資料の存在から、唐津焼が天正末年に焼かれていたことは事実であろう。しかし、これまでに紹介されている岸岳系唐津のすべてが、生産地で

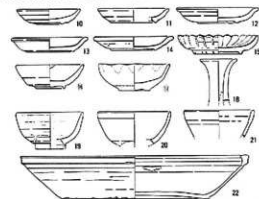
考えられているほど古いものなのだろうか。ここでは、大坂で出土する薬灰釉の製品のあり方を再確認することを含め、岸岳系唐津の年代観の検討を行いたい。

岸岳系唐津は佐賀県東松浦郡北波多村の岸岳周辺で焼かれ、窯構造や出土する製品から唐津焼ではもっとも古い一群と考えられている。岸岳系の窯は、文禄3年(1594)の岸岳城の廃城によって廃窯になり、製品はそれ以前に焼かれたと考えられている[水町和二郎1986]。

今回の調査では、3層出土遺物に皿屋窯・帆柱窯などで生産された皮鯨手の皿101・130・163や、山瀬窯の製品と考えられる碗68、窯の特定はできないものの薬灰釉の製品50・89などがみられる。しかし、薬灰釉の製品が多いとはいえ、それ以上に灰釉系の碗・皿が出土している。また、船場地域で確認できる豊臣後期1の遺物群でも、薬灰釉の製品が後期2に比較して多いものの、唐津焼の主体を占めることはない。したがって、大坂では薬灰釉の製品が唐津焼の主体を占める組成はなく、出土量が比較的多いのが、唐津焼が多数流通し始める豊臣後期1の段階といえる。岸岳系の山瀬窯の製品がまとめて出土し



第4面下火気層下層の遺物（6～9唐津焼、○は山瀬窯）



第4面下火気層の遺物（16～22唐津焼）

Fig.45 枚方宿遺跡第3次調査出土の唐津焼とその共伴遺物 [下村1994]から作製

たことで注目された枚方宿遺跡の遺物群も、第4 面下火災層下層の遺物(Fig.45-1~9)が大坂でいう豊臣後期1、第4 面下火災層の遺物(Fig.45-10~22)が後期2の組成である[下村節子1994](註3)。このように、皿屋窯・帆柱窯・飯洞窯・山瀬窯などの製品が、豊臣後期1の段階に他の唐津焼と共に出土する事実を重視すれば(註4)、岸岳系の唐津窯のみを古く考えることはむずかしい。むしろ、大坂での岸岳系唐津の出土傾向は、岸岳系諸窯を含

むいくつかの窯が、1598 年をあまりさかのほらない時期に焼かれ始めたことを示していると考えられると同時に、生産地の唐津焼の年代観をも再検討する必要があることを示しているといえよう。もちろん、それは岸岳系諸窯が唐津焼の系譜の中でもっとも古い一群であったことを否定するものではない。

岸岳系唐津窯以外に葦灰釉の製品を生産した窯に、福岡県の上野・高取焼の窯がある。上野・高取系と考えられる製品は、徳川初期から初期伊万里を伴う段階に比較的多く認められていた。これらの中には、胎土の粗い一群(Fig.46-1~3)と緻密な一群(Fig.46-5~8)があり、前者の中には、直方市内ヶ磯窯の製品と考えられる遺物がある(註5)。したがって、元和期以降に上野・高取焼が大坂で流通するようになって考えていたのである。しかし、船場地域の豊臣後期1の資料中に上野・高取系と考えられる破片があり、少なくとも上野・高取焼が慶長年間に流通して

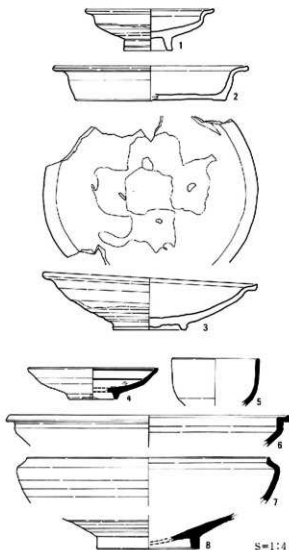


Fig.46 徳川初期の葦灰釉陶器(1~3は元和7 年銘木札と
共伴、5~8は初期伊万里と共伴、4は砂目の磁器)

いた可能性を考慮しなければならないと考える。上野・高取系の製品には肥前製品と区別しがたいものも多く、産地を確定することが困難な場合が多い。しかし、今後の検討によって、唐津系陶器の流通についても検討することが可能になるといえよう。

まとめ

今回の調査で出土した陶磁器は、同時期の船場などの調査と比較すると、量的には少ないものであった。しかし、層位的に確認された遺構・遺物は、これまでの豊臣期の陶磁器編年を再検討させる資料であった。とくに、藁灰釉の唐津焼の出土は、これまで実態がよくつかめていなかった大坂の岸岳系唐津の一端を明らかにしたといえる。また、唐津焼の年代観についても再考すべき問題を含んでいる資料である。これらの検討のためには、唐津系陶器の生産地の確定が前提となるが、大坂で出土している膨大な唐津系陶器のほとんどは、窯を特定できる状況ではない。これまで唐津焼とされていたものに、異なる生産地の資料が含まれている可能性は大きい。これらが細分されることによって、消費地側からの唐津系陶器の検討が、より深められるといえよう。

(森毅)

(註)

- (1) これまでの報告では、時期区分の呼称に不統一がある。ここでは、豊臣氏大坂城期を豊臣期、豊臣氏大坂城期前半を「豊臣前期」、同後半を「豊臣後期」と記述する。
- (2) 『難波宮址の研究』第九において、碗V類としたものである[大阪市文化財協会1992]。近年の日中の共同研究により、この種の碗が福建省詔安県秀篆窯で生産されたことが明らかにされた[栗1994]。
- (3) 財団法人枚方市文化財研究調査会の下村節子氏のご配慮により資料を実見させていただいた。
- (4) 佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二・宇治章両氏のご配慮により、同館所蔵の岸岳系唐津を実見させていただいた。これによって、飯洞窯や山瀬窯の製品が大坂で出土していることが確認できた。
- (5) 直方市教育委員会の田村悟氏のご配慮により永満寺宅間窯・内ヶ磯窯の製品を実見させていただいた。

第3節 まとめ

1) 屋敷地の規模

調査区は、豊臣期を通じて溝・道路を境にした北と南の二つの敷地に分かれており、SB501は南の敷地の北東外郭に位置していたと考えられた。SB501が含まれていた敷地の大きさは、現在の街区や江戸時代の絵図と対照してあると推測できる。

SB501やその北のSD501・SF301の方向は、北で西へ65°振っている(直交は北で東へ25°)。これは現在の造幣局アパート群の方向である、北で西へ約70°(北で東へ20°)の振りに近い。一方、造幣局の西側に広がる町の方角は北で東へ約5°の振りで、これと異なっている。調査区が位置する川縁の地域の方角の違いは、明治初期の地図や江戸時代の絵図でも表現されたものがあり、1b層上面のSA101(17世紀後半以降)の北で西へ64°振るといふ方向を介して豊臣期の遺構まで遡ることが、今回の調査結果から推定できる。また、明暦元年(1655)の「大坂三郷町絵図」(Fig.42 66頁)に川縁の区画とその西の間を南北に縦断する堤が描かれており、以降の絵図にもその痕跡が見えるものがある。これが明治に受け継がれ、現在の調査区西側の造幣局の境界になったと考えられる。明暦元年の絵図の堤がいつまで遡るかは不明だが、豊臣期の遺構の振れから、SB501の敷地の西端は現在の造幣局と他の街区との境付近と推定して大きなまちがいはないと考える。その場合、敷地の東西幅は約55mになる。南北の大きさはわからない。

2) 各時期の遺構と天満本願寺などの関係

次に、今回検出した各時期の遺構が、天満本願寺をはじめとする一帯の歴史的変遷過程とどのような関係にあるのかをみてみたい。

まず、伊藤毅氏の推定する本願寺＝造幣局説(Fig.41 63頁)と調査区的位置関係を比較すると[伊藤毅1987]、SB501が含まれる南の敷地はSD501やSF301を境に南に展開し、ここだけで東西推定長約55mのひとつの屋敷地として完結すると推定され、本願寺本体とは直接はつながらない可能性が高い。直接の関係があるとすればSD501やSF301以北の北の敷地であるが、今回の調査区には狭い範囲しか含まれず、建物などは未検出である。

次に時期的な関係をみると、前章第2節では、5層出土陶磁器は豊臣前期(1580～1598)、4b層(SD501下層)は前期の可能性を残しながら後期(1598～1615)の1段階、4a層(SD501

上層)は後期1、3層は後期2と後期1の中間、2層は後期2と推定した。遺構変遷との関係では、敷地境が溝であったⅡ-1期は5層と4b層、道に変わったⅡ-2期は3層と2層に対応し、Ⅱ-2期の下限は慶長19年(1614)末の大坂冬の陣である。

整地前であるⅠ期の下限は、Ⅱ-1期の遺構との方向や位置の類似から天満寺内町の建設が始まる天正13年(1585)以降まで降る可能性があり、調査区がある浜側の一区画は、本願寺寺内町の建設より本格的な開発が遅れる可能性が考えられる。Ⅱ-1期の上限は本願寺が京都へ移転する天正19年(1591)頃の豊臣前期の後半が想定される。

Ⅱ-1期からⅡ-2期との間、敷地境が溝から道へかわる時期は陶磁器編年から豊臣後期1段階のある時期と推定された。豊臣後期1とは1598～1615年の間のほぼ前半期に当たり、本章第1節の考察から、この時期には京都に移転した本願寺の跡地に天満御坊が置かれていた可能性が考えられている。これは慶長13年(1608)に現在の天満別院の地に移る。また、調査地周辺の天満橋西側から大川東岸の地域は慶長12年(1607)に火災に遭っている。調査では豊臣期の焼土層は1枚で、それは大坂の陣に伴うと推定され、慶長12年の火災の痕跡を検出していない。あくまで可能性のひとつであるが、溝から道への転換は、慶長12年の火災後の町の再整備に伴うものであったかもしれない。この火災の痕跡は、今後の周辺調査で注意しなければならない重要なポイントである。

以上の推定をまとめるとFig.47のようになる。

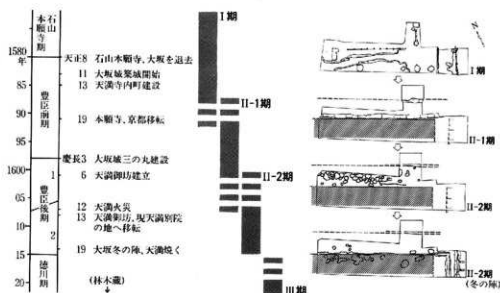
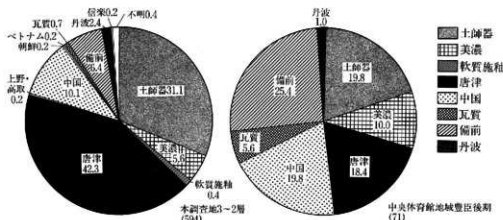


Fig.47 各時期の遺構と年代推定

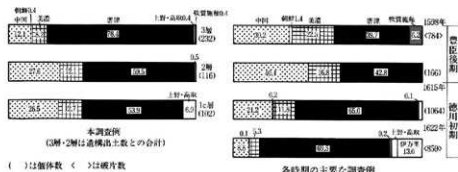
SB501のある南の敷地は、周辺の施設や景観の変化にもかかわらず、基本的な姿を保って20年以上にわたり存続したと考えられる。この屋敷地の性格については遺構・遺物から推測する術がない。ただ、大坂城に近い地域には徳川期になると、大川の水運を利用して幕府の材木蔵や米蔵・材木奉行屋敷が置かれ、津藩や岸和田藩の蔵屋敷もあった。また中之島周辺には各藩の蔵屋敷が集まり、このような施設の設置は大川川岸の土地利用のひとつのパターンとなる。今後の周辺の調査に際しては、今回検出した豊臣期の屋敷も、同様の施設の前身の可能性を含めて検討する必要がある。

3) 豊臣期陶磁器の組成 (Fig.48, Tab.4)

今回の調査で量的にまとまった陶磁器が出土したのは3層段階、2層段階、1c層である。推定した時期を繰返すと、3層段階の陶磁器は豊臣後期1と2の中間、2層段階は後



1. 陶磁器の産地・種類別組成



2. 施釉陶磁器の産地別組成

Fig.48 陶磁器層別組成グラフ

期2、1c層は層序からは徳川期に入ると推定されるが、出土陶磁器は豊臣後期2とかわらない。

これらの陶磁器組成を、既調査地点での豊臣後期のそれと比較すると、2層・1c層では施釉陶器に占める青花・美濃焼・唐津焼などの比率は、似た傾向を示している。ところが、3層段階では唐津焼の比率が極端に高く、そのために青花・美濃焼の比率が低くなっており、一見すると伊万里出現前後の組成に近い。しかし、3層段階の唐津焼には徳川初期に多い折縁皿は一点もなく、薬灰釉の製品が目立つなど、後期でも古い様相を示しており、層序や遺構の変遷もこれに合っている。ここで注意しなければならないのは、2層段階の陶磁器の多くが、南の敷地にあるSB501が火災に遭った当時使用されていたと推測されるのに対し、3層段階の大部分を占めるSF301内土塀群とSF301整地層(3b・3a層)出土陶磁器は、南だけでなく北の敷地からも廃棄された陶磁器で、単純には比較できない点である。また、SB501は屋敷の外郭を囲む長屋のような建物と推測したが、屋敷のなかでも周辺に位置し、建物の用途や使用者の階層によって、中心部とは陶磁器組成も異なると予想される。

(南秀雄)

Tab.4 陶磁器層別組成表

地層・遺構	土師器			瓦質土器	中国	朝鮮	ベトナム	美濃	唐津	上野高取	備前	丹波	信楽	軟質施釉	他
	皿	皿以外	焼塩壺												
5層	9	1	0	0	4	0	0	5	0	0	0	2	0	0	0
4b層	3	1	0	0	5	0	0	1	0	0	0	1	1	1	3
4a層	0	3	0	1	1	0	0	0	3	0	0	4	2	0	0
小計	12	5	0	1	10	0	0	6	3	0	0	7	3	1	3
3d層	1	0	0	0	1	0	0	1	4	1	0	2	0	0	0
3c層	4	0	3	0	1	0	0	1	5	1	0	3	1	0	1
3b層	12	5	5	1	9	0	0	6	30	2	0	4	3	0	0
3a層	8	7	1	0	3	1	1	5	40	4	0	7	0	0	0
3層(遺構)	33	23	9	1	14	0	0	6	87	8	1	14	5	0	2
小計	58	35	18	2	28	1	1	19	166	16	1	30	9	0	1
2層(遺構)	48	15	5	1	28	0	0	14	58	5	0	7	2	1	0
2層	3	2	1	1	4	0	0	0	6	0	0	1	3	0	1
小計	51	17	6	2	32	0	0	14	64	5	0	8	5	1	1
1c層	47	9	8	0	27	0	0	13	53	2	7	13	9	0	1
合計	168	66	32	5	97	1	1	52	286	23	8	58	26	2	5

参 考 文 献

- 伊藤純1990、「豊崎神社境内出土の土器」：『葦火』26号 大阪市文化財協会
- 伊藤純1993、「いわゆる桃山陶器についての粗描—大阪の発掘成果を基本に据えて—」：『中近世土器の基礎研究』Ⅸ 日本中世土器研究会
- 伊藤毅1987、「天満の成立」：『近世大阪成立史論』生活史研究所
- 内田九州男1985、「城下町大阪」：『日本名城集成 大阪城』小学館
- 内田九州男1989、「豊臣秀吉の大阪建設」：『よみがえる中世』2 平凡社
- 大阪市文化財協会1985、『上畑マンション建築に伴う難波宮跡発掘調査報告(NW85-14)略報』
1988、『大阪城跡』Ⅲ
1992、『難波宮址の研究』第九
- 大橋康二1989、『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小野正敏1982、「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」：『貿易陶磁研究』№2 日本貿易陶磁研究会
- 1985、「出土陶磁よりみた一五、一六世紀における画期の素拙」：『MUSEUM』№416 東京国立博物館
- 尾上実1983、「南河内の瓦器碗」：『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』
- 唐津市教育委員会1988、『小十古窯跡』唐津市文化財調査報告書第26集
- 鏑込敏雄1987、「摂津中島本願寺寺内町考」：『地方史研究』206号
- 熊本県編1924、『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3冊
- 佐久間貴士1987、「大阪城惣構と下層遺構出土の陶磁器」：『貿易陶磁研究』№7 日本貿易陶磁研究会
- 佐久間貴士編1989、『よみがえる中世』2 平凡社
- 櫻井成康1970、『豊臣秀吉の居城 大阪城編』日本城郭資料出版会
- 佐藤浩司1993、「近世播磨鉢—北部九州における播磨の生産と流通(1)」：『法哈囉』第2号 博多研究会
- 佐藤巧1979、『近世武士住宅』叢文社
- 下村節子1994、「枚方宿成立期の陶磁器」：『財団法人枚方市文化財研究紀要』第3集
- 新修大阪市史編纂委員会1989、『新修大阪市史』1～3巻
- 鈴木秀典1988、「第Ⅵ章第5節 輸入陶磁器」[第Ⅴ章第5節 大阪城跡における輸入陶磁器の時代的变化]：『大阪城跡』Ⅲ 大阪市文化財協会
- 1990、「輸入貿易陶磁の編年の検討—天正年間から江戸前期」：『貿易陶磁研究』№10 日本貿易陶磁研究会
- 1991、「大阪城跡の豊臣前期と後期」：『関西近世考古学研究』Ⅰ 関西近世考古学研究会
- 高槻市教育委員会1984、『摂津高槻城跡本丸発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第14集
- 田中清美1989、「豊臣期武家屋敷出土の桔梗紋鬼瓦」：『葦火』18号 大阪市文化財協会
- 趙哲清1983、「第Ⅱ章 層序 付節 遺構検出面の便宜的な呼称」：『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ 大阪市文化財協会

横伸一郎1990、「堺環濠都市遺跡出土の貿易陶磁(Ⅰ)―出土陶器の分類を中心として―」:『貿易陶磁研究』No

10 日本貿易陶磁研究会

天満別院1961、『天満別院誌』

土岐市美濃陶磁歴史館1993、『桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』

1994、『統桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』Ⅱ

直木孝次郎・小笠原好彦編著1991、『クラと古代王権』 ミネルヴァ書房

永田信一他1994、『大きな宝珠形のつまみがある陶片』:『リーフレット京都』No66 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

仁木宏1994、『大坂石山寺内町の復元的考察』:中部よし子編『大坂と周辺諸都市の研究』 清文堂

西田宏子他1993、『南雲・島物―南海諸島の茶陶』 根津美術館

直方市教育委員会1982、『古高取内ヶ磯窯』

直方市教育委員会1983、『古高取永満寺宅間窯』

広瀬和雄1981、『第6章 遺物』第7章 結語:『大園遺跡発掘調査概要―府道松原～泉大津線建設予定地内―』 大阪府教育委員会

藤澤良祐1986、『瀬戸大窯発掘調査報告』:『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V

1991、『瀬戸古窯址群―古瀬戸後期様式の編年』:『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X

本願寺史編纂所1961、『本願寺史』

本願寺津村別院1924、『津村別院誌』

水町和二郎1986、『古唐津』:『古唐津』 出光美術館

南秀雄1994、『城下町「天満」を発掘』:『筆火』50号 大阪市文化財協会

森毅1992A、『第Ⅲ章第7節 豊臣氏大坂城期の遺構と遺物』:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会

1992B、『第V章第5節 16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器』:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会

1994A、『大坂出土の唐津焼の変遷』:『第4回九州近世陶磁研究会資料』

1994B、『大坂出土の美濃陶器の変遷』:『統桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』Ⅱ 土岐市美濃陶磁歴史館

森島康雄1992、『畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代』:『大和の中世土器』Ⅱ 大和古中近研究会

森本朝子1993、『ベトナムの古窯址』:根津美術館前掲書

大和郡山市教育委員会1993、『郡山城跡第7次追手堀・多聞櫓跡発掘調査報告書』大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

横田賢次郎・森田勉1978、『太宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―』:『九州歴史資料館研究論集』4

栗建安1994、『津州窯若干問題の初歩探討』:『SWATOW』Ⅱ

あ と が き

当協会が、大坂城下町の発掘調査を本格的に手がけるようになって10年がたった。もちろん、以前にも当該期の遺跡は調査されているが、それは難波宮跡の調査に伴うものなどで、豊臣期の町それだけで発掘調査されるようになったのはここ10年のことである。われわれの調査は、大坂城から上町、船場へと広がり、その成果の一部は『大坂城跡』や『難波宮址の研究』と題した一連の報告書などで公にしてきた。本書では、上町や船場に加えて、天満地域の発掘調査の成果を世に出すことができた。天満の考古学的調査は始まったばかりで、本書も内容的に不十分な点多々あるかと思うが、これからの調査に対する展望と課題は示しえたと思う。本書が、城下町の一翼を担っていた天満の歴史をよりいっそう明らかにするための、ささやかな契機となれば幸いである。

(永島 暉臣慎)

索引

S	SA601	16	金箔押瓦	25,47,49,53
	SA602	16,18	け 顕如	5,64,65
	SB501	11,12,18,20,23,25,27,28,74, 76,77	こ (豊臣)後期 1	70,75
	SD201	23,25,27,44,45	(豊臣)後期 2	70,71,72,75
	SD301	23,25	興正寺	4,61,65
	SD501	11,12,14,18,20,23,25,27,47, 51,52,68,70,74	小十室	36,53
	SD602	16,18	小柄	51
	SF301	12,14,23,25,27,31,70,74,77	ゴミ穴	25,27,70
	SX302	23,44,46	米蔵	6,76
あ	堀り大面	49	小森谷窯	53
	上野・高取焼	39,56,72	さ 材木蔵	6,56,66,76
い	石臼	20,49	材木奉行	6,13,66,76
	石組	13,59	鳳屋窯	71,72
	糸印	51	し 信楽焼	30,46,68
	移動式竈	36	占切建水	40
	伊藤紋	61,64,74,78	志野焼	36,41,44,45,56
	色絵	30,68	鯉瓦	49
	印章	27,50	秀篆窯	73
	印青花	44	新羅江庄	3,4
う	内ヶ蔵窯	72,73,78	清朝	60
	内田九州男	5,61,78	す 砂敷	34
	漆碗	51	砂目	34,36,41
お	大坂三郷町絵図	66,67,74	せ 青白磁	29
	鬼瓦	25,49,78	つ 堤	64,67,74
	織部焼	41,70	津藩	6,76
か	皮鯉手	34,70,71	て 天満川崎御坊	62,63
き	桔梗文	47,49	天満御坊	62,63,65,66,75
	岸岳系唐津	31,34,36,70,71,72,73	天満森	4
	岸和田藩	6,76	天満別院	62,65,75,78
	九州系の播鉢	39	天満堀川	5
	教如	65,67	と 砥石	49
			(川崎)東照宮	6
			徳化窯	60

	豊臣後期 1	70,71,72,75,76
	豊臣後期 2	70,77
な	中島天満宮	4,5
	長屋	28,77
	(大坂)夏の陣	5,7,9,49,56,68
	波緑皿	28,31,36,40,41,44,45
	軟質施軸陶器	30,31,68
の	鬘斗瓦	49
は	灰志野	34
	破損率行	6,62,63,66,67
	浜	3,31,64,75
	飯洞甕窯	72,73
ひ	火消し壺	31
	枚方宿遺跡	72
ふ	舟付	64
	(大坂)冬の陣	1,5,7,12,14,23,66,70,75
	芙蓉手	25,39,41,59,70
へ	ベトナム	40,79
ほ	帆柱窯	34,71,72
ま	饅頭心	36,68
み	水指	40,60
む	棟込瓦	49
め	名山手	44,70
も	初穀	44,53
や	山瀬窯	31,71,72,73
り	李朝	41,59
わ	渡辺党	4
	渡辺津	4,67
	輪違い	49
	窯灰	28,29,31,34,36,39,40,41,45, 56,70,71,72,73,77

**Archaeological Reports
of
Tenma-Honganji Temple Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of the Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 1994

February 1995

Osaka City Cultural Properties Association

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Background and purpose of research requirements..... 1

Chapter II Historical setting of the site and development of the excavation of the Osaka
Castle downtown site.....3
1 Site location in a historical setting.....3
2 Current situation of the research in the Osaka Castle downtown site..... 7

Chapter III Results of research..... 11
1 Research outline..... 11
2 Stratigraphy..... 14
3 Features and artefacts of Phase I; before the land readjustment in
the Toyotomi Period (AD 1580-1615) 16
1) Features..... 16
2) Artefacts..... 18
4 Features of artefacts of Phase II; after the land readjustment in the Toyotomi Period 20
1) Features..... 20
i) Sub-phase II-1..... 20
ii) Sub-phase II-2..... 23
iii) House remains (feature code: SB501)..... 27
2) Artefacts..... 28
i) Pottery..... 28
ii) Rooftiles..... 47
iii) Stone objects..... 49
iv) Metal objects..... 50
v) Wooden objects..... 51
vi) Net sinkers of baked clay..... 52
5 Features and artefacts of the Tokugawa Period (Phase III)..... 54
1) Features..... 54
2) Artefacts..... 56

Chapter IV Investigation of features and artefacts..... 61
1 *Tenma-honganji* temple examined through historical documents..... 61
1) Location of the *Tenma-honganji* temple..... 61
2) Circumference of the *Tenma-honganji* temple..... 64
3) *Tenma* area after the move of the *Honganji* temple to Kyoto..... 65

2 Investigation of pottery discovered at the <i>Tenma-honganji</i> temple site.....	68
1) Chronology of pottery from the end of 16th to the late 17th centuries.....	68
2) Dating of pottery uncovered at each strata.....	68
3) <i>Warabai</i> glazed porcelain discovered at the Early Modern Osaka.....	70
3 Conclusion.....	74
1) Scale of the residential area.....	74
2) Relationship between features, and the <i>Tenma-honganji</i> temple and other historical incidents.....	74
3) Pottery assemblage of the Toyotomi Period.....	76
References.....	78
Postscript	
Index	

原色図版



豊臣期印章 (×1)



豊臣期青花碗



葉灰釉



灰釉



透明釉

図 版



調査地周辺の景観
(南から)



調査地から大阪城を望む



6層上面全景(東から)



SA602 (東から)



5層上面全景(西から)

図版四 5層上面・4b層(Ⅱ-1期)の遺構



5層上面全景(東から)



4b層形成後のSD501とSB501(東から)



SD501断面(東から)



4b層形成後のSD501とSB501(西から)

図版六 3層上面(Ⅱ-2期)の遺構



SF301内土壌群とSB501 (西から)



SX302 (西から)



2層下面全景(西から)

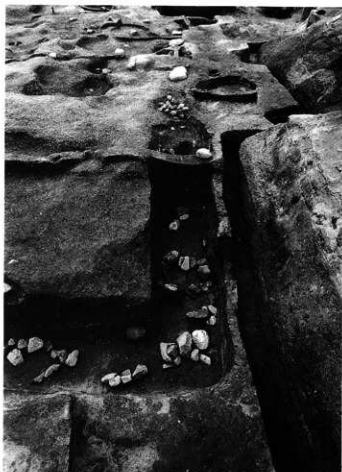


2層下面全景(東から)



SZ201・202 (東から)

SD201とSB501
北側柱列（東から）



図版九 2層下面(Ⅱ-2期)の遺構

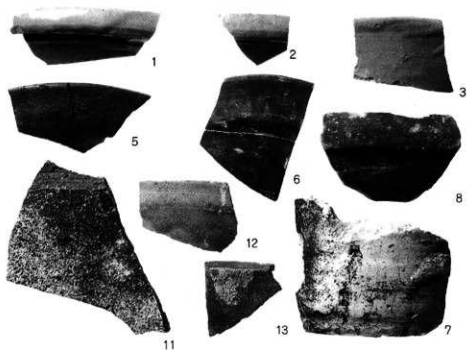


SD201 (北から)

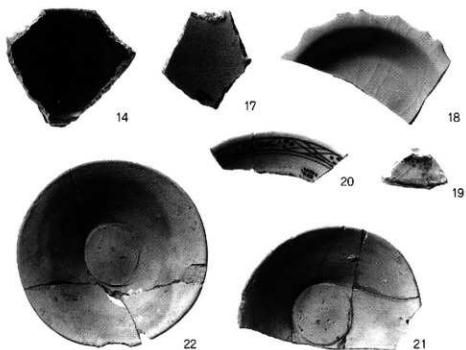
1層遺構全景(東から)



SK106・105(南から)



1・2 (6b層)、3・5～8 (6a層)、11(SK604)、12・13 (SK609)





25



26



29



30



28



27



31



32

4b層



34



36



35



38



39

4a層



33



55



54



53



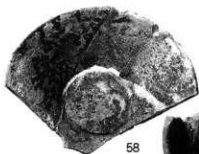
63



51



50



58



60



56



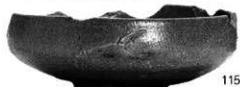
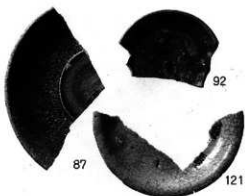
57



61



62



87(SK318)、92・94(SK325)、121(SK341)、79~81(SK314)、68(SK306)、119(SK334)、89(SK321)、128(SK342)、145(SK350)、99(SK323)、115(SK335)



83



101



141



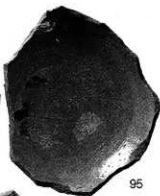
73



85



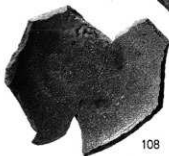
90



95



104

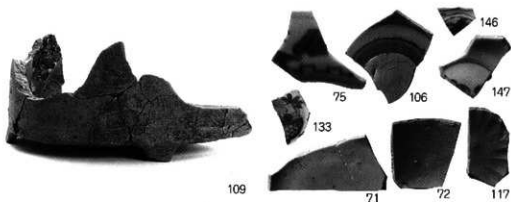
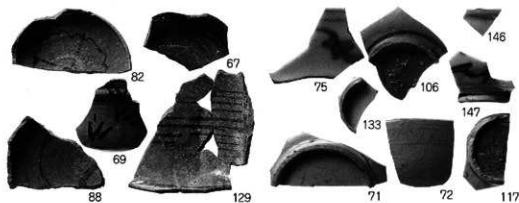


108



111

83(SK314)、101(SK323)、141(SK346)、73(SK313)、85(SK316)、90(SK321)、95(SK325)、104(SK328)
108(SK333)、111(SK332)



67(SK305)、69(SK307)、82(SK314)、88(SK318)、129・133(SK342)、71・72(SK309)、75(SK312)、106(SK328)、117(SK335)、146・147(SK350)、109(SK333)、160・161・168・170(3a層)



173



178



184



183



184



183



182



181



182



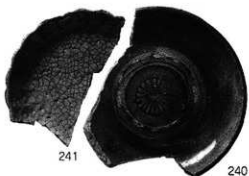
181



194



206



241



240



239



212



242



199

173・178(3d層)、181～184(3c層)、194(SK210)、206(SK212)、239～242(SK219・220)、212(SK224)
199(SK211)



195



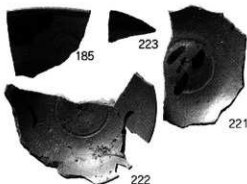
244



218



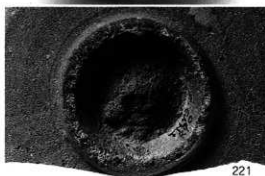
197



185

223

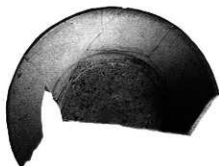
222



221



236



230

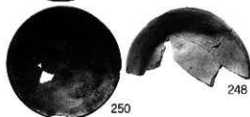


247

231



225



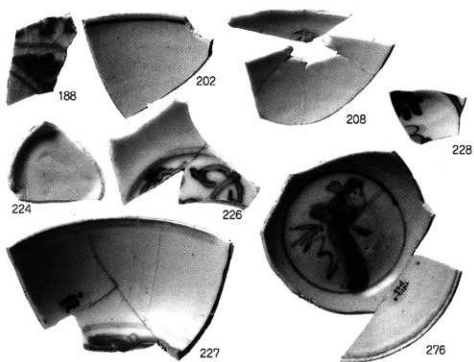
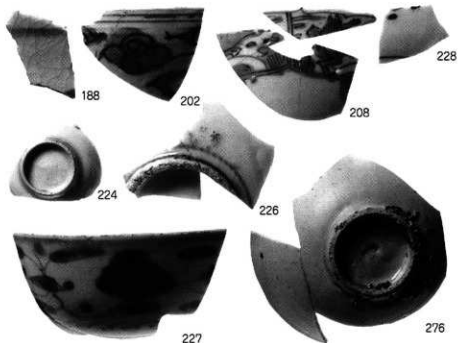
250

248



229

195・197(SK210)、218・221～223・225・229～231・236(SK218)、185(SK205)、244・247・248・250(SK219・220)



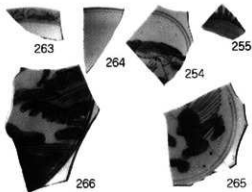
188(SK207)、202(SK211)、208(SK212)、224・226～228(SK218)、276(2層)



272



262



263

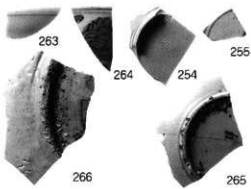
264

254

255

266

265



263

264

254

255

266

265



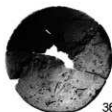
343



344



358



367



368



358



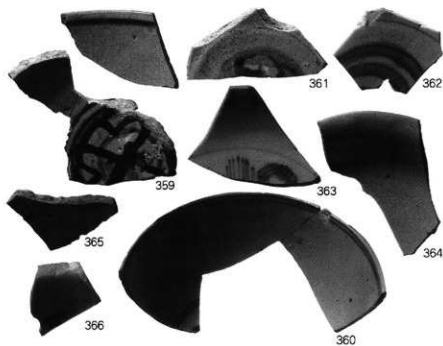
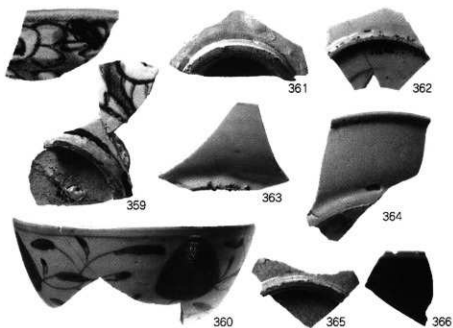
373



374



382





291



292



293



296



297



299



300



305



307



302



308



309



306

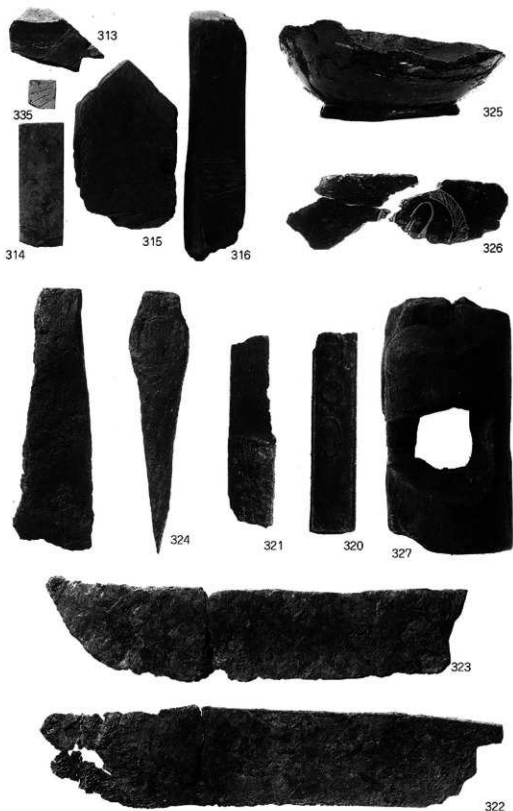


311

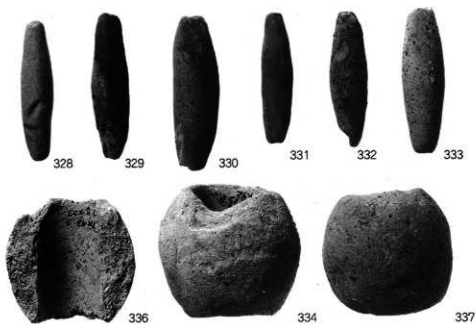


310

291(4a層)、292(SK218)、293・302・305(1c層)、296(SK309)、297・310(SK342)、299(SK211)、300(SK224)、307(3b層)、308(SK212)、309(5層)、306(SK302)、311(3a層)



313(SK307)、314・335(SK211)、315(1c層)、316(2~1c層)、324(SK205)、321・323(1c層)
320(SK219・220)、322(SD501)、325(6a層)、326(SK343)、327(SD501下層)



328(SK601)、329(SK607)、330(SK609)、331~333・337(1c層)、334(SK212)、336(SK342)



清朝磁器



水指

天満本願寺跡発掘調査報告 I

ISBN 4-900687-06-5

1995年2月15日 発行

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540 大阪市中央区法門坂1-1-35

(TEL 06-943-6833 FAX 06-920-2272)

版下出力 有限会社 正巧堂

〒530 大阪市北区天満3-4-12

印刷・製本 ナニワ印刷株式会社

〒530 大阪市北区天満1-9-19

**Archaeological Reports
of
Tenma-Honganji Temple Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of the Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 1994

February 1995

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Tenma-Honganji Temple Site in Osaka, Japan**

Volume I

A Report of the Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 1994

February 1995

Osaka City Cultural Properties Association

天満本願寺跡発掘調査報告Ⅰ 正誤表

頁	行	誤	正
例言	9	宮本裕 <u>治</u>	宮本裕次
24	Fig.9	3層上面遺構(Ⅱ-2期)実測__	3層上面遺構(Ⅱ-2期)実測図
28	3	塀 <u>の</u> としての	塀としての
54	19・24	SK10 <u>6</u> では	SK105では
67	註2)7	秀吉 <u>当</u> 時の	秀吉当寺の
75	Fig.47	(<u>林</u> 木蔵)	(材木蔵)
77	7	<u>折</u> 縁皿	溝縁皿
78	7	発掘調査報告(NW85- <u>14</u>) 略報	発掘調査(NW85-17) 略報
78	23	文化財研究紀要	文化財研究調査会研究紀要
78	24	1989	1988・1989
78	27	輸入貿易陶磁	輸入貿易陶磁器
78	30	高槻城跡本丸	高槻城本丸跡
79	5・25	大坂出土の桃山陶磁」Ⅱ	大坂出土の桃山陶磁」
79	11	内ヶ磯窯	内ヶ磯窯跡
79	12	宅間窯	宅間窯跡
79	13	発掘調査概要	発掘調査概要・Ⅴ
79	28	追手櫓	追手東隅櫓

